

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.176

2008年1月

平成20年 平野総長年頭あいさつ「新年を迎えて」



目次

●年頭あいさつ	
平成20年 平野総長年頭あいさつ「新年を迎えて」 —世界をリードする研究成果を通じての教育を—	3
●ニュース	
高等研究院フォーラム2007「若手研究者の育成とテニュアトラック制度 —これからの大学人事改革を考える—」を開催	8
平野総長が研究所統合事務室・文系統合事務室・情報連携基盤センターを視察 ウォリック大学と産学連携協定を締結	9 10
研究環境基盤部会委員が附置研究所等を訪問	10
野依記念物質科学研究館と野依記念学术交流館が 第48回 BCS 賞（建築業協会賞）を受賞	11
第4回、第5回名古屋大学国際戦略アドバイザー招へいセミナーを開催	11
平成19年度名古屋大学語学学校スクーリング研修を実施	12
第34回、第35回防災アカデミーを開催	12
第15回経営協議会を開催	13
永年勤続者表彰式を挙行	13
●知の未来へ	
山重水複疑無路、柳暗花明又一村 —私と甲状腺ホルモンの研究— 曹 霞（環境医学研究所助教）	14
●学生の元気	
平成19年度名古屋大学体育会会長表彰式	15
平成19年度名古屋大学体育会会長表彰式 受賞者及び受賞団体のことば	16
●部局ニュース	
「平成19年度まちとすまいの集い」を開催	19
名古屋の外国人留学生・研究者のための地震防災研修会を開催	19
三重県大紀町錦地区において津波被災交流会を開催	20
市民公開講座「知っておきたい甲状腺の病気」を開催	20
先端技術公開セミナーを開催	21
「ニセ科学・情報を見る学問の眼」シンポジウムを開催	21
JICA 国別研修「ウズベキスタン抵当法解説書作成」を実施	22
JICA 国別研修「イラン法整備支援」を実施	22
第28回附属図書館研究開発室オープンレクチャーを開催	23
第10回附属図書館友の会トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催	23
地球教室「ナゴヤで化石を探そう！！」を開催	24
平成19年度地域貢献特別支援事業「鳥っておもしろい」を開催	24
流鏝馬デモンストレーションを開催	25
キャンパス探鳥会を開催	25
附属農場動物場において動物慰霊祭を実施	25
●名大を表彰訪問された方々 平成19年9月16日～12月15日	26
●受賞者一覧 平成19年9月16日～12月15日	27
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成19年11月16日～12月15日	31
●イベントカレンダー	34
●ちょっと名大史	
名大トピックス—15年のあゆみ—	36

平成20年 新年を迎えて —世界をリードする研究成果を通じての教育を—





名古屋大学

総長 平野 眞一

名古屋大学の役職員はじめ構成員の皆様、学内外の関係者の皆様、新年明けましておめでとうございます。皆様それぞれ新年での発展を期して、よい年を迎えられたこととお慶び申し上げます。

まずは、法人化による激動の3年9ヶ月の間に、非公務員化に伴う各種の人事労務関係規程の改定、企業会計方式の採用による会計システムの改定などに加えて、制度上の改革や中期目標・中期計画期間が進行する中での総人件費の削減への対応など、予測を超える大学運営に係る課題の解決に向けて協力いただいた構成員の皆様にご礼申し上げます。

大学は、教育、研究、社会貢献を重要な軸に据えた活動が期待されており、本学は、そのうえで研究重点大学として世界をリードする研究成果とその研究基盤に立脚した教育の質の向上に真摯に取り組み、「勇気ある知識人」を育てるべく努力しております。学生が満足できる教育、名古屋大学で学んで良かったと思う環境づくりに一層努めていきたいと思っております。本学は、専門性を身につけさせるのは当然であります。そのまえに多様な人類社会の大切な一員としての社会性、責任ある個人にあるべき教養を身につけさせ、それぞれの分野で活躍する「選ばれる人」すなわち「真のリーダー」である「勇気ある知識人」を育てなければなりません。

これまで、機会あるたびにお話しておりますが、現在、学問・科学が迫られている課題はいよいよ明確になってきております。急速に発達してきた科学技術は、人類の福利という「光」とともに、その生存を脅かす「影」をももたらしております。21世紀にあっては、学問・科学は「光」の面を進展させるとともに「影」の面を制御して、全地球規模での持続可能な発展を図ることが最も重要な課題であり、その実現が責務であると考えております。本学もまた、

このような人類史的課題の解決を担う「知の拠点」として、その活動を展開することが求められていると認識しております。そのために、本学は「創造的な研究活動によって真理を探求し、世界屈指の知的成果を産み出す」ために研究重点大学として世界最高水準の学術研究を推進するとともに、その基盤の上に「勇気ある知識人を育てる」ことが本学の使命と心得て活動してきております。

私は、「研究においては個が輝く個人主義を大切に、大学の教育、運営においては組織主義を重視する」という考えでこれまで大学を運営してきました。各研究については日本あるいは世界における位置づけを真摯に評価し、本学が研究重点大学であることを考えると、それぞれの分野で世界をリードすること、また加えて分野をリードするキーパーソンがさらに必要であると感じています。

なお、一口に教育といっても家庭教育、初等中等教育、高等教育、また他者や社会との関わりから学び取る教育など、その有り様は多様であります。突き詰めるところ「自己教育の方法を確立する。」ことにあると思えます。大学はそのための最高の「場」でなければならないと自覚しています。その「場」を醸成するためには、本学のミッションや特質を活かしながら、他の大学と「質の高い教育実践」を基軸として連携するとともに競い合うことを「是」とする教育パラダイムの創造が不可欠であります。その行き着く先が「学生中心の大学」ということになりましょう。しかし、「学生中心の大学」は「学生におもねる」ことではありません。このことは学問の伝授と真理の探求のための人間集団が最終的に University として結実した歴史的事実からも、大学は、「学」を中心とした「場」であることは明白であります。学生の多様なニーズに可能な限り真摯



野依特別教授が高等研究院名誉院長に就任



李名誉博士が高等研究院名誉院長に就任

にゆえながらも、彼等の良心、智慧、個性を開花させ、社会へ送り出すことが大学の使命であり、ひいては現代社会が抱える諸問題を解決するための最善の方途であり、最も近道であると考えます。

「勇気ある知識人」を陸続と輩出するためにはどうするか。しごく当たり前にいえば、体系的かつ先進的なカリキュラムに基づき、人間的にも教育者としても優れた「人」によって教育が行われることであります。この原理の実現は極めて厳しい現実にあります。次世代を担う「ひと」の育成にあえて挑戦していきましょう。

大学においては、学術の深化・発展のために基盤の確立を怠ることは許されませんが、同時に、将来を見据えた教育・研究環境の充実に向けた改革をいたずらに恐れて、安易な状態に甘んじて何もしないでいることもまた許される状況ではありません。言い古されていることではありますが、本質を見失うことなく、改めて日々改善、改革に努めたいと思います。

以下に、ここ1年の本学での主な動きを振り返り、昨年の総長の中間評価時に記した方策を加えて述べたいと思います。私の残任期間は長くはありませんが、今後の国立大学法人名古屋大学の基盤づくりに大変重要な時期であり、任期中は全力で任務遂行に努めることをお誓いします。

○6月には、グローバルCOEプログラムの選考結果が公表され、本学においては、申請した7件のうち、3件のプログラムが採択されました。採択された拠点について

は、国際的に卓越した研究を展開するとともに、世界で活躍できる若手研究者を育成します。申請数を含めて、まだ至らない点が多く残念に思っております。採択されなかった拠点については、本学の組織・規模の上で研究者の組織づくりの観点からの課題があったものと受け止めています。今後、我が国を代表する研究重点大学の一つとして、世界をリードする研究成果を創出する環境づくりに一層努力をしてみたいと思います。

○科学研究費補助金などの競争的資金に加えて、文部科学省「科学技術振興調整費（女性研究者支援モデル育成）」、「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」、「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」、「専門職大学院等教育推進プログラム」、「大学院教育改革支援プログラム」などが採択され、活動しております。今後とも、このような競争的資金によるプログラムが多く公募されると思いますので、日々必要な教育・研究環境の改善に向けた努力を続けたいと考えております。

○名古屋大学の国内的、国際的な存在感を高め、高等研究院の活動を一段と充実させることを目的として、4月から、野依良治本学特別教授（理化学研究所理事長）及び李遠哲本学名誉博士（前台湾中央研究院院長）に、高等研究院名誉院長に就任していただきました。世界的に著名な研究者であるお二人より、国際的視点からの助言をいただき、本学を更に発展させるとともに、高等研究院がアカデミーとしての役割を発揮できるよう活動を充実させていきます。

平成19年度「グローバルCOEプログラム」採択一覧

分野	拠点リーダー	所属・職名	拠点のプログラム名称
生命科学	近藤 孝男	大学院理学研究科・教授	システム生命科学の展開：生命機能の設計
化学・材料科学	渡辺 芳人	物質科学国際研究センター・教授	分子性機能物質科学の国際教育研究拠点形成
人文科学	佐藤 彰一	大学院文学研究科・教授	テキスト布置の解釈学的研究と教育



学術奨励賞授与式（7月18日）



豊田講堂完成修祓式

○次世代を担う若手研究者支援の姿勢を大学の特色として打ち出すべく、大学院博士後期課程の学生を対象に、「学術奨励賞奨学金」及び「国際学術交流奨励事業」を創設しました。学術奨励賞は、大学院博士課程後期課程1年次の学生で、人物・研究水準ともに優秀で、かつ、研究科長から推薦のあった者を対象に受賞者を決定し、奨学金として年額30万円を3年間給付するもので、今年度は、196名の4月入学者と4名の10月入学者、合計200名に授与しました。国際学術交流奨励事業は、諸外国との交流の一層の拡充を図り、相互の教育・研究水準の向上及び豊かな感性と国際性を持つ教育・研究者の養成に資することを目的としており、1ヶ月以上にわたり関連する研究機関で研修する制度に約4,000万円を充てて、100名程度を派遣することを予定しています。

○本学の教育研究活動を一層推進するため、優れた業績を有する研究者を招致する「特別招へい教授制度」を制定し、8月に飯島澄男名城大学教授に、10月に益川敏英京都産業大学教授に、また、12月にはCOE特別招へい教授として甲斐荘正恒首都大学東京特任教授、真鍋淑郎プリンストン大学客員研究員に委嘱しました。先生方には、特に学生や若手研究者に、「学問のなりわい」を教えていただきたいとお願いしております。

○トヨタ自動車および関係会社のご理解により進められていた豊田講堂の改修・増築が無事終わり、12月25日に引渡しをいただきました。今後は、知の拠点である大学の学術・文化の情報発信の拠点として有効に活用してまいりたいと考えております。2月2日には、竣工式とホームミングデイを計画しており、学外の方々にも公開いたします。また、関係者のご努力のお蔭で学内各施設の耐震改修工事が進められております。今後は、アメニティも勘案したキャンパスの整備にも努めていきたいと思っています。

○6月には、医学部附属病院門及び外堀が文化財建造物と



文化財建造物として登録された医学部附属病院門及び外堀

して登録されることになりました。国の文化財への登録は、愛知県内の国公立大学では初めてのことで、今後とも文化を継承・発展させる大学の使命を忘れずに建物等の保守管理にあたりたいと考えております。

○国際関係では、今年新たにインド科学大学院大学など5つの大学と大学間連携協定を締結しました。また、平成19年度文部科学省「国際的な産学官連携の推進体制整備」について、中部地域の国際産学官連携の中核大学としての役割を担うことや、海外ベンチャーとの共同研究推進など特色ある計画となっている本学の取り組みが評価され、採択されました。これに関連し、9月にノースカロライナ州立大学及びノースカロライナ大学チャペルヒル校と、また、11月にウォリック大学と産学連携協定を締結しました。これは、それぞれの大学において独自に創出される知的財産、さらには共同研究を通じて開発された知的財産の活用及び商業化を通じて社会に貢献することを目指すものであり、また、それぞれの大学間での教員及び事務職員の交流も促進しようとするものです。

○第2回 AC21学生世界フォーラムが、7月22日から29日の間、フランスのボンゼシヨセ工科大学において開催されました。なお、AC21国際フォーラム2008をノースカ



3大学と産学連携協定を締結：
ノースカロライナ州立大学

ロライナ州立大学において開催する予定です。学内からの積極的な参加を期待しております。

- ウズベキスタン、モンゴルに引き続き、9月7日にベトナムのハノイ法科大学内に日本法教育研究センターを設置しました。10月19日には、政策研究大学院大学において東京フォーラムを開催しました。今回は、「アジアに繋ぐ知の架け橋～飛翔するアジア諸国への法整備支援」と題して、本学が取り組む、日本とアジア諸国との新しい関係を築き上げるための様々な先駆的事業のうち、「アジア法整備支援プロジェクト」等を取り上げ、日本司法の国際化をめぐる動向などを中心に、アジアにおける本学の諸活動を紹介しました。本学の中央アジアを含むアジアを軸にした活動は、国内ばかりでなく、国際的にも高く評価されており、今後更なる実質的な活動を加速させたいと考えております。



3大学と産学連携協定を締結：
ウォリック大学



3大学と産学連携協定を締結：
ノースカロライナ大学

- 全学同窓会の海外支部については、5月21日に北京支部が、また、9月7日にベトナム支部が設立されました。これにより海外支部は6つとなりました。

- 11月には、機関認証評価の現地調査を受けております。本年の法人評価と併せて、第2期目での運営費交付金の査定にも関連するものであり、真摯に対応しなければなりません。

- 7月には、文部科学大臣が示した「研究機関における公的研究費の管理・監査ガイドライン」に基づき、公的研究費の不正使用防止に関する推進部署として、研究推進室にコンプライアンス部門を新設しました。大学が責任ある機関として、遵法精神をもって活動しなければなりません。ご理解をお願いします。

- 体育会の活動においては、航空部が、3月に埼玉県妻沼滑空場で行われた第47回全日本学生グライダー競技選手権大会団体の部で全国優勝しました。同大会での優勝は、国立大学としては初めてであり、さらに、東海地区の大学としても初めてでした。また、陸上競技部が、9月に行われた全日本大学女子駅伝選考会において2位と



第47回全日本学生グライダー競技選手権大会団体の部で全国優勝した航空部



日本法教育研究センターを開設（ベトナム・ハノイ）



東京フォーラム

なり、東海地区の代表として10月に仙台で行われた全日本大学女子駅伝に出場しました。入学式においても呼びかけておりますように、競技において切磋琢磨して高成績を出すとともに、課外活動をも通じた人間性の涵養に努める場として、学生の活動を支援したいと思います。

一方で、大学院入学者選抜において出題ミスが相次いで発生しました。公平かつ公正に実施されなければならない入学試験において出題ミスが発生したことは、誠に遺憾であります。今後は、全学的にチェック体制の総点検を行い、再発防止に万全を期すよう努めてまいります。また、パソコンやUSBメモリーの盗難などによる個人情報への漏洩事案が複数発生しました。再発防止にむけた防犯対策、情報セキュリティ対策の強化に努めます。

事務職員の人事については、職員一人ひとりがその力を十分発揮できるように、本部と各部局間の交流をより盛んにし、きめ細かい対応が出来るよう、各部の動きを把握している担当者を人事労務課に配置したいと思います。とくに、学生へのフロントである教務・学生担当職員や医事業務担当職員の啓発・研修、国際関係や産学官連携担当職員の専任制導入など、弾力的な運用に努めたいと思っております。

来年度の予算としては、国全体の高等教育関係の予算は厳しい状況ではありますが、継続事業に加えて、新たに共同大学院設置に向けたプロジェクトとしての創薬科学研究科の創設に向けた準備を始めることが出来るようになりましたので、医学系をもととする病理・生理・遺伝子、化学・生命学をもととする分子設計による創薬、薬学をもととする薬理関係からなる新しい地域連携創薬科学研究科の創設の準備を始めます。また大学間連携によるFD・SDの充実のための山手コンソーシアム、学習教育支援環境としてのラーニング・コモンズ構築事業、専門医研修対応費、卒後臨床研修必修化に伴う研修経費が認められ、新たな取り組みによる教育の質の向上に努めたいと思っております。

加えて、超高圧電子顕微鏡連携ステーションの実質化、プラズマナノ加工・原子層反応ダイナミクス解析システム、病院外来患者診療案内表示システム、附属病院設備整備費などによる研究、診療環境の整備を進めることが出来るようになりました。建物関係では、19年度補正予算分として新たに全学教育棟改修Ⅲ期、理学系総合研究棟（D、E館）改修、20年度予算事業として工学系研究棟（5号館）改修、看護師宿舎の建設が認められました。皆様のご尽力に感謝します。

終わりに当たって、皆様方に重ねてのお願いがあります。冒頭で述べましたように厳しい環境の中にあっても、本学が社会から託され、期待されている使命は不変であり、この理念を達成しさらに飛躍しなければなりません。そのためにも、大学独自の基金を持ち、学生育英事業、教育・研究環境整備事業、国際交流事業はじめ産学連携や社会貢献活動の充実・発展に努めたいと思っております。このたびの大学創立70周年事業の一環としての「名古屋大学基金」にお力添えをいただきたくお願い申し上げます。

また、最近、教職員の皆様の負担が年々増えており申し訳なく思っております。組織的な改革を進めておりますが、事務の合理化、簡素化にさらに努めてまいりますので、大学の運営について、建設的なご意見をお寄せください。

今後、構成員の皆様、学内外の関係者の皆様のご理解、ご協力を得て、より質の高い教育・研究を通して社会に貢献できる世界に冠たる大学を目指して前進することを所信として、年頭のあいさつとさせていただきます。



名古屋大学基金パンフレット

高等研究院フォーラム2007「若手研究者の育成とテニュアトラック制度 - これからの大学人事改革を考える -」を開催

高等研究院フォーラム2007が、11月30日(金)、IB 電子情報館大講義室において開催されました。

同フォーラムは年1回程度開催されており、今回は「若手研究者の育成とテニュアトラック制度 - これからの大学人事改革を考える -」をテーマとして、大学関係者、研究者、大学院生、一般の方々など全国から約130名の参加を得て開催されました。とくに若手研究者の養成・確保がますます重要になってきている近年、創造的かつ競争的な研究環境を実現し、能力のある若手研究者の意欲を高めるとの観点から、人事透明性の高いテニュアトラック制度の導入が不可欠であるとの認識が広がっています。こうした中、平成18年度に文部科学省は科学技術振興調整費「若手研究者の自立的な研究環境整備促進事業」を開始し、世界的研究拠点を目指す研究機関において、テニュアトラック制度を導入する試みを支援しています。本学高等研究院のプロジェクト「高等研究院研究者育成特別プログラム」はその一環として採択され、現在、本学を含め全国の21大学がこの事業によりテニュアトラック制度の導入を進めています。テニュアトラック制度は、人材の流動化が進んでいるアメリカ社会ではうまく機能していますが、日本の大学社会に根付かせるためには、様々な配慮や工夫をする必要があります。こうした背景のもとで、テニュアトラック制度の確立および定着における問題点、研究支援と研究評価のあり方などについて多様な視点から意見を交換し、これからの大学の人事改革のあり方を見出す機会となるよう今回のフォーラムは企画されました。

フォーラムでは、山本理事のあいさつの後、4名の講師による講演が行われました。最初に、高比良幸蔵文部科学省科学技術・学術政策局人材政策企画官が、近年のポストドクター等の雇用状況や進路動向を踏まえた上で、若手研究人材のキャリアパスの一部に位置づけられているテニュアトラック制度の重要性とそれに対する期待を述べました。続いて、近藤高等研究院長および柴田治呂東京農工大学若手研究支援室長が、本学および東京農工大学のテニュアトラック制度の進捗状況と今後の展開についてそれぞれ紹介しました。引き続き、菅 裕明東京大学先端科学技術



会場の様子

研究センター教授が、米国のテニュアトラック制度について自身の体験談を紹介した上で、日本に適したテニュアトラック制度のあり方について提言を行い、切磋琢磨型アカデミズムの形成における限りなく公正な審査の重要性を強調しました。また、日本の競争的研究資金の問題点に関連して、テニュアトラック制度の導入は、「同時に多くのシステム改革を推進しなければならない」と問題を提起しました。

それに続くパネルディスカッションは、大塚 進科学技術振興機構科学技術振興調整費業務室副調査役と高橋雅英本学医学系研究科教授の2名がパネリストとして加わり、坂神高等研究院副院長の司会の下で進行されました。まず、同フォーラムの前に実施した高等研究院テニュアトラック教員宛ての匿名アンケートで提起された、教員側から見たテニュアトラック制度への意見や要望に基づき、現制度の問題点などについて議論しました。その後、若手研究人材のキャリアパスの形成に関連して、今後の大学人事改革について展望しました。最後に、奥村高等研究院副院長が全体の議論についてまとめ、閉会の辞を述べました。

フォーラムに引き続いて行われた懇親会では、パネリストの方々に加え、学内外の多くの方々に参加し、活発に議論する姿なども見られ、大変有意義なものとなりました。



講演する近藤高等研究院長



講演する高比良文部科学省人材政策企画官



講演する柴田東京農工大学教授



講演する菅東京大学教授

平野総長が研究所統合事務室・文系統合事務室・情報連携基盤センターを視察



研究所統合事務室の視察

12月5日(水)、平野総長が、杉浦理事、大峯理事らとともに、改修工事が完成した研究所統合事務室及び文系統合事務室と、地下電気室の浸水対策工事が完了した情報連携基盤センターを視察しました。

研究所統合事務室は、平成18年10月、エコトピア科学研究所、太陽地球環境研究所、環境医学研究所の本学3附置研究所の事務部門が統合されたもので、統合事務室は、共同教育研究施設1号館2階の一部、約385m²を改修し大部屋化することで整備されました。

また、昨年4月に統合された文系6部局の統合事務室も同時に整備されました。文系統合事務室は、文系総合館1階と2階の約1,120m²を改修、1階には文系教務課事務室、2階には文系総務課・経理課事務室と6研究科長室が整備されています。

それぞれの統合事務室は、10月から新しい事務室での業務を開始しています。学内各所に点在していた事務室が統合事務室に集中化されたことにより、さらなる業務の効率化・合理化を図っていきます。

情報連携基盤センターは、昨年1月、地下1階にある電気室が浸水し停電となり、全国共同利用システム(スーパーコンピュータ等)、一部の情報基盤サービス及び学術情報ネットワーク(SINET)の運用に支障が生じました。今回、再発防止のための対策として、老朽化した排水ポンプの更新・増設、電気室のかさ上げ、漏水検知器の設置などを行いました。また、同時に耐震、屋上防水などを改修し、建物の機能回復を図りました。

総長らは、山口施設管理部長及び関係部局から説明を受け、施設の利便性や維持管理等について意見交換がもたれました。



文系統合事務室の視察



情報連携基盤センターの視察

ウォリック大学と産学連携協定を締結

11月27日(火)、平野総長らが英国を訪問し、ウォリック大学との間で産学連携に関する協定を締結しました。

これは、9月に締結された米国ノースカロライナ州立大学及びノースカロライナ大学チャペルヒル校との協定に引き続いて締結されたものです。相互のリエゾン・オフィス設置に取り組むとともに、それぞれの大学において独自に創出される知的財産や共同研究により開発された知的財産



協定書に署名をした平野総長とスリフトウォリック大学長

の活用及び商業化を通じて社会に貢献することを目指しています。

また、両地域の産業界や研究機関に関する情報を共有して、新技術及び産業の創出を支援するとともに、教員や事務職員の交流も促進しようとするものです。

ウォリック大学は、1965年の設立後、研究及び講義の優秀さで国際的な名声を確立した英国でも屈指の高等教育機関です。社会科学、自然科学、人文科学の3学部を設置しており、特に自然科学は、産業界との密接な関係を保ち、分子生物学、パラレル電算研究、製造工学、数学、物質化学の分野での優秀さが広く知られています。また、欧州でもトップクラスのビジネススクール(WBS)、テクノロジー研究施設(WMG)、サイエンスパークやベンチャー企業研究所なども擁しています。

ウォリック大学はまた、国際学術コンソーシアム(AC21)の主要メンバーとして本学とはこれまでも交流が行われており、今回の協定締結により、英国企業への大学の技術シーズ、特許の情報発信、共同研究や受託研究の発掘、大学の特許のライセンスを進める等、更なる国際的な産学官連携の進展が期待されます。

研究環境基盤部会委員が附置研究所等を訪問

12月7日(金)、文部科学省科学技術・学術審議会分科会研究環境基盤部会委員の飯吉厚夫中部大学総長及び有川節夫九州大学理事が、文部科学省の松永賢誕学術振興局研究機関課研究調整官をはじめとする3名とともに、本学附置研究所である太陽地球環境研究所、エコトピア科学研究所及び全国共同利用施設である地球水循環研究セン



訪問調査の様子

ターを訪問し、意見交換を行いました。

今回の訪問調査は、国立大学の法人化後の附置研究所のあり方、国による関与・支援のあり方、大学の枠を越えた共同利用研究・共同研究の推進のあり方等について、研究者や大学役員の意見を傾聴し、現場での工夫、課題、要望を今後の同部会における議論に反映させることを目的に行われたものです。

当日は、平野総長、山本理事の出席のもと、それぞれの訪問先において、藤井太陽地球環境研究所長、松井エコトピア科学研究所長、上田地球水循環センター長をはじめとする関係者が当該部局の概要説明を行った後、実験・観測装置等の視察を行い、その後、率直な意見交換を行いました。

最後に、事務局において、総長、山本理事、大峯理事、関係部局長を交えて、次期中期目標・中期計画に向けての附置研究所等のあり方等について意見交換を行い、訪問調査は終了しました。

野依記念物質科学研究館と野依記念学術交流館が 第48回 BCS 賞（建築業協会賞）を受賞

野依記念物質科学研究館と野依記念学術交流館が、第48回 BCS 賞（建築業協会賞）を受賞しました。BCS 賞は、「優秀な建築物をつくり出すためには、デザインだけでなく施工技術も重要であり、建築主、設計者、施工者の三者による理解と協力が必要である」という社団法人建築業協会初代理事長竹中藤右衛門の発意により昭和35年（1960年）に創設され、以後、わが国の良好な建築資産の創出を図り、文化の進展と地球環境保全に寄与することを目的に、毎年、国内の優秀な建築作品が表彰されています。



受賞記念プレート



野依記念物質科学研究館



野依記念学術交流館

野依良治特別教授の2001年ノーベル化学賞受賞を記念して計画・建設されたこの2つの建物は、プライバシーおよびセキュリティーを重んじる研究実験棟と、学内外の研究者の交流・居住の場となる交流棟という対極にある施設です。

約80m離れた位置にあるその複雑な内容を持つ2つの施設を緩やかに結び付けた建築計画と、建築主である名古屋大学、設計者の飯田善彦氏、施工を担当した株式会社銭高組・株式会社伊藤工務店・小原建設株式会社の三者のコラボレーションにより実現された本プロジェクトが高く評価されたものです。

第48回のBCS賞は、全国で合計15点の建築物が選ばれました。表彰式は、去る11月16日（金）、東京パレスホテルで行われ、建築主、設計者および施工者がそろって表彰されました。

なお、これらの建物については、本誌キャンパススクローズアップ1（No.132、24-25ページ）および2（No.133、12-13ページ）で詳しく紹介されています。

第4回、第5回名古屋大学国際戦略アドバイザー招へいセミナーを開催

11月22日（木）、第4回名古屋大学国際戦略アドバイザー招へいセミナーが開催され、馬万華北京大学教育学院教授が「『世界標準』を見据える中国の高等教育－北京大学の国際戦略を読み解く－」をテーマとして講演しました。セミナーでは、中国全体および北京大学における国際戦略に関する現状と課題、対策等が興味深い事例とともに説明されました。参加者からは、北京大学と米国の大学との共同学位プログラムに関する質問や、北京大学のインターナショナル・オフィスが膨大な人数の海外からの来訪者にどのように対応しているのか等の質問が相次ぎました。また、



第4回セミナーの様子

終了後には、参加者から、「このセミナーを通して、北京大学など中国の一流大学がなぜ急速に国際的知名度をあげられたのか理解できた。日本の大学にとってヒントが多かった。」との感想が寄せられました。

続いて、12月13日（木）、第5回同セミナーが開催され、山本理事をはじめ、学内教職員及び学生の参加を得て、胡建華南京師範大学教育科学学院院長が「中国高等教育マネジメントの改革と課題」をテーマとして講演しました。

講演では、近年の中国高等教育の急速な拡張ぶりとともに、「211工程」「985工程」等4つの国家プロジェクトが紹介されました。大学の質を高めるために毎年専門家による厳しい大学評価が行われていることや、アカデミックパワーの増長などについて、参加者らは強い関心を示し、なかでも「独立学院」（公立大学の元に設立されている私立セクター）に関する質問が相次ぐなど、中国高等教育の最新事情を知るための非常に有意義な機会となりました。



第5回セミナーで講演する胡南京師範大学教育科学学院院長

平成19年度名古屋大学語学学校スクーリング研修を実施

平成19年度名古屋大学語学学校スクーリング研修が、6月19日(火)～12月4日(火)の6ヶ月間にわたり実施されました。

この研修は、今後の更なる国際化に対応した事務職員を養成するため、今年度から実施しているもので、語学学校(イーオン)で実践的な英会話能力を身につける初級コースと中・上級コースの2コースに分けたカリキュラムで編成されており、今年度は各コースに6名が参加しました。

授業は両コースとも前半レッスン・後半レッスンに分かれており、英会話のレッスンでは日常の場面で使う表現を、業務英語のレッスンでは実際の大学業務の場面で使う表現

をそれぞれ学びました。

全ての授業が英語で行われるということで、当初は受講生も不安と緊張の中で受講していましたが、回数を重ねるにつれて流暢な発音とともに積極性も身に付き、活気ある環境の中で、充実した6ヶ月の研修期間となりました。受講生は1月13日にTOEIC試験を受験し、研修成果を測定しました。

今回の受講生がこの研修経験を糧に、業務上語学が必要とされる場面で、リーダーシップを発揮することが期待されます。



初級の集合写真



中・上級のレッスン風景

第34回、第35回防災アカデミーを開催

第34回防災アカデミーが、11月12日(月)、環境総合館レクチャーホールにおいて開催されました。今回は、中林一樹首都大学東京教授による「東京の防災まちづくりと耐震補強の現状および課題」と題した講演が行われました。

東京は1923年の関東大震災で壊滅的な被害を受けており、地震とその後の火災への備えは都市計画の観点からも最重要課題と位置づけられてきました。講演では、防災まちづくりや耐震補強の推進について、東京都が展開しているさまざまな震災対策がひとつひとつ丁寧に紹介されました。さらに、その対策がどのように相互に関連するのかについての解説もあり、長期的なビジョンにたった震災対策

の全貌を知ることができました。

続いて、12月7日(金)には、第35回防災アカデミーが開催され、中島正愛京都大学防災研究所教授(防災科学技術研究所・E-ディフェンスセンター長兼務)による「強く安全な建物をどう造るか—技術開発の検証としての役割をもつ構造実験」と題する講演が行われました。

阪神・淡路大震災で多くの建物が破壊され、その結果、たくさんの人命が失われたことを受けて、実物と同じつくりで大きさも同じである建物を揺らして実験できる「E-ディフェンス」の整備が国家プロジェクトとして進められてきました。この講演では、実物大の構造実験を行うことの

意義や、整備された巨大振動台の概要、実験台を使って行われた様々な実験成果が多くの動画を交えて紹介されました。



講演する中林首都大学東京教授



講演する中島京都大学教授



92名の聴衆でいっぱいになった第35回防災アカデミーの会場

第15回経営協議会を開催



経営協議会の様子

第15回経営協議会が、12月9日(日)、名古屋市内のホテルを会場として開催されました。

会議では、平野総長のあいさつの後、本学を取り巻く最近の主な動向、人事院勧告への対応、本学の財政状況、大学地域コンソーシアムについて、各担当理事から説明が行われ、審議の結果、了承されました。

続いて、高橋理事から、平成18事業年度に係る業務の実績に関する評価結果、大学機関別認証評価における訪問調査、研究費等の不正使用防止、名古屋大学の国際ランキング、平成19年度施設整備状況について報告が行われました。

また、外部委員からは、学生育成に係る環境整備、職員の採用方法、大学地域コンソーシアムにおける枠組み等について、貴重な意見が多数寄せられました。

なお、次回の経営協議会は、2月17日(日)に開催予定です。

永年勤続者表彰式を挙行



記念撮影

平成19年度名古屋大学永年勤続者表彰式が、11月22日(木)、野依記念学術交流館会議室において挙行されました。被表彰者10名のうち8名が出席し、最初に、平野総長から一人ひとりに表彰状と記念品(銀盃)が手渡され、「永年にわたりそれぞれの立場・分野にてご尽力された皆様にお祝いを申し上げます。法人化に際し、新しい制度設計等に対応すべく多くの課題の解決に向けて、皆様と一緒に努力してまいりましたが、ここまで来ることができたことに対し、皆様方に深く感謝しております。教職員が互いの役割と責任を自覚して、大学に貢献していただき、未来の名古屋大学が一層発展する基礎を一緒に築き上げていきましょう。今後のさらなるご活躍を心から期待しております。」との祝辞がありました。続いて、被表彰者を代表して、村岡 勲医学部附属病院薬剤部第一製剤室薬剤主任から、「名古屋大学の一員であることを誇りに思い、これからも職務に従事していきたい。」との決意が述べられました。

山重水複疑無路、柳暗花明又一村 —私と甲状腺ホルモンの研究—

曹 霞 環境医学研究所助教

私が1996年に中国医科大学を卒業し、内分泌医になった頃、医学研究は分子生物学とインターネットの普及によってこれまでにないスピードで進展していました。こうした時代の波に乗り遅れないように、分子生物学の知識を身につけ、内分泌疾患の研究をしようと考え、2000年、名古屋大学医学系研究科細胞情報医学専攻内分泌・代謝学専門分野に入学しました。それは私と分子甲状腺学との最初の出会いです。

1986年に甲状腺ホルモン受容体がクローニングされ、これが転写因子であったことから、甲状腺ホルモン作用の分子機序は遺伝子発現調節を中心に急速に解明され、そのゲノミック作用の概要が確立されました。私が内分泌・代謝学教室に入った時、同教室でも甲状腺ホルモンの新規標的遺伝子として RCAN2 遺伝子を同定していました。その翻訳産物は、蛋白脱リン酸化酵素カルシニューリンの内因性抑制蛋白質の一つです。当時、RCAN1の発現はカルシニューリンの活性化によって増加することが報告されていたので、私はカルシニューリン阻害剤 FK506 とその構造類似体 Rapamycin を用いて、甲状腺ホルモンによる RCAN2 の発現を検討しました。すると予想に反して、FK506 は発現を抑制せず、Rapamycin が抑制しました。そのため、Rapamycin は mTOR

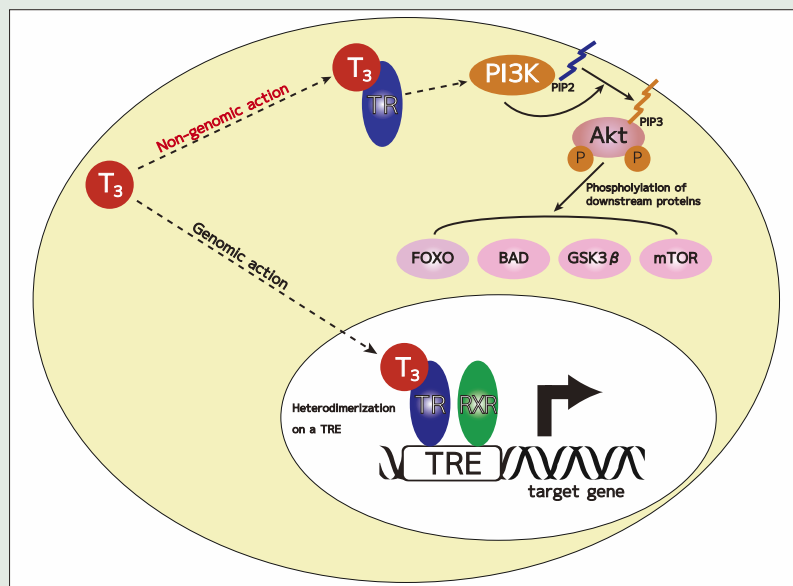
阻害剤であり、この時、甲状腺ホルモンは mTOR を含むキナーゼカスケードを活性化して RCAN2 の発現を増加させるのではないかと考えました。この結果が甲状腺ホルモンのノンゲノミック作用を明らかにするきっかけとなりました。その後詳細に研究し、甲状腺ホルモンが受容体を介して PI3K-Akt-mTOR-p70S6 kinase からなるカスケードを活性化することを報告しました。

こうして振り返ってみると一見簡単ようですが、実際には実験結果に自信が持てなかったことも多く、一つの実験を納得できるまで何回も繰り返し、なかなか進みませんでした。適刻而止*は智者のやり方かも知れませんが、その時は夢中で、実験に失敗してもただ突き進むことのみでした。

論文が他の研究者によって引用され、自分の研究が役立つことを知ることは大きな喜びでした。甲状腺ホルモンのノンゲノミック作用は、これまでに数十編の論文に引用され、様々な細胞や動物モデルでその生理的意義が明らかにされました。この成果により、私は米国甲状腺学会のベシックフェロー賞を受賞し、またポルトガルで行われた甲状腺ホルモン不応症の会議に招待講演され、多くの研究者と議論することができました。甲状腺ホルモンのノンゲノミック作用には、まだ解明すべき問題がたくさん残っています。この研究が臨床医学への応用の基礎となり、研究者のみならず患者さんにも役立つことを夢見つつ、これからも研究を進めていきたいと思っています。

ちなみにタイトルは、山は重なり川も入り組み道は行き止まりかと思ったのに、柳の茂る暗い所を抜けるとそこには一村があったことから、道が行き詰まったかと思った途端、新しい展開が開けることを意味しています。

*「適刻而止」は、「結果が極端にならないよう、適切なときにやめる」意。



甲状腺ホルモンによる細胞内 PI3K-Akt シグナリングカスケード (signaling cascade) の活性化

平成19年度名古屋大学体育会会長表彰式



名古屋大学体育会は、12月4日(火)、環境総合館1階レクチャーホールにおいて、名古屋大学体育会会長表彰を挙行了しました。

この表彰は、本学体育会における優秀な個人・団体及びその指導者の栄誉を讃え、その功績を広く顕彰することを目的としたもので、今年で19回目となります。

今年は、11月26日(月)の体育会会長表彰審査会の審査を経た「個人の部」11名、「団体の部」6団体が、本学体育会会長の平野総長から表彰され、1年間のめざましい成果を讃えられました。

なお、受賞者および記念団体には、副賞として、名古屋大学校友会から記念品等が贈呈されました。

■個人の部

運動部名	氏名	所属・学年	出場大会・成績
アーチェリー部	菅原 幸也	情報文化学部・3年	2007年度東海学生アーチェリー個人選手権大会 男子個人 優勝
舞踏研究会	小島 健児	工学部・4年	第34回中部日本学生競技ダンスモダン選手権大会 第1位
	飯田亜里紗	医学部・4年	
漕艇部	山口 朋美	文学部・2年	第39回中部学生ボート選手権大会 女子シングルスカル 第1位・ダブルスカル 第1位
	伊藤麻耶香	教育発達・M1	第39回中部学生ボート選手権大会 女子ダブルスカル 第1位
ヨット部	渡邊 淳史	経済学部・4年	2007年度中部学生ヨット個人選手権大会 国際スナイプクラス 第1位
	酒見 建至	工学部・1年	
	熊崎 佑介	経済学部・1年	
ライフル射撃部	堀部 宗尚	理学部・4年	第25回中部学生ライフル射撃伏射大会 個人戦 10m エアライフル伏射60発競技 優勝
航空部	都築 位兆	指導者(監督)	第47回全日本学生グライダー競技選手権大会 団体戦 優勝
陸上競技部	金尾 洋治	指導者(監督)	第25回全日本大学女子駅伝対校選手権大会 東海地区選考会 第2位

■団体の部

運動部名	出場大会・成績
アーチェリー部	2007年度東海学生アーチェリー王座出場校決定戦 男子団体 第2位
航空部	第47回全日本学生グライダー競技選手権大会 団体戦 優勝
舞踏研究会	第38回東西対抗学生競技ダンス選手権大会 優勝
漕艇部	第39回中部学生ボート選手権大会 総合第1位
ライフル射撃部	第25回中部学生ライフル射撃伏射大会 団体戦 10m エアライフル伏射60発競技 優勝
陸上競技部	第25回全日本大学女子駅伝対校選手権大会 東海地区選考会 第2位
	第46回全国七大学総合体育大会 女子総合6連覇

平成19年度名古屋大学体育会会長表彰式 受賞者及び受賞団体のことば

各受賞者及び受賞団体の中から、3受賞者3団体のことばを紹介します。

[個人の部]

困難を乗り越えて

菅原 幸也 アーチェリー部



東海学生アーチェリー個人選手権大会本選の様子

2007年8月22～24日に行われた東海学生アーチェリー個人選手権大会本選で優勝し、9月の全日本学生アーチェリー個人選手権大会に出場することができました。

アーチェリー部に所属している人は、大学に入学してからアーチェリーを始めたという人が大半で、私も大学に入学してからアーチェリーを始めました。どの競技においても経験者と未経験者との差というのは少

なからずあると思います。初めての大会でその力の差を痛感し、いつか互角に勝負ができるようになりたいと強く思うようになりました。

先輩方の指導を受け、同級生と協力しながら日々努力していくうちに練習での点数は少しずつ上がっていきましたが、試合では練習では出ていた点数が出せないという時期が続きました。色々なアドバイスを受け、試合と練習での精神状態を近づけなければいけないということに気がきました。このことを意識するようになってから試合でも練習の点数に近い点数が出せるようになり、3年になって初めて大会で優勝することができました。

全国大会では思うような結果を残すことができずとても悔しい思いをしましたが、全国大会のレベルの高さを身をもって感じることができ、とても良い経験となりました。

今後もこの経験を活かし、部員同士切磋琢磨しあいながら頑張っていきたいと思っています。

すがはら こうや
情報文化学部自然情報学科3年
1986年生まれ 埼玉県出身

[個人の部]

中部学生選手権二連覇を目指して

山口 朋美 漕艇部



全日本新人選手権の様子

中部学生選手権は、その名の通り中部圏の大学生が集まる大会です。愛知・岐阜・三重・静岡などから強豪校が集結し、練習の成果を競い合います。私は昨年目標を、この大会で優勝すること、と決めていました。なぜなら、全国の大学生が集まるインカレの前に中部で戦うことは、今後の戦略を立てたり、自分の弱点を知ったりするために必要なもので、私はこの大会を重要視していたからです。

練習で最も意識したことは、「毎日の練習において常にレースを意識する」ということでした。そのため練習中は一瞬でも気が抜けなくなり、負荷が上がり苦しい練習となりましたが、勝つために精一杯取り組みました。また、練習中には積極的に他の部員と並べて競争したり、ビデオを見てフォームの改善をしたりすることにも力を入れました。

本番では緊張しましたが、練習の成果を出すことができました。その結果優勝することができ、とても嬉しかったです。ゴールした時には、中部で一番になったことを実感し、一生懸命努力してよかったと強く思いました。名古屋大学はこの大会で、総合優勝もすることができました。

私の今年の目標は、中部学生選手権で去年に続いて二連覇することです。現在ボート部には一年生に女子が多く入部し、男子だけでなく女子も活気づいています。来年、再び総合優勝もできるように、部員一丸となって毎日の練習に取り組んでゆきたいと思っています。

やまぐち ともみ
文学部人文学科2年
1987年生まれ 愛知県出身

[個人の部]

千里の道も一歩から

堀部 宗尚 ライフル射撃部



伏射競技の練習風景

ライフル射撃は、標的に何十発と弾を撃ち込み、その合計点を競うスポーツです。標的には同心円がいくつも描かれており、中央ほど得点が高くなっています。そのため、試合で勝ち進むためには何が重要であるかを考えたとき、標的の中央に正確に弾を撃ち込む技術はもちろんのこと、試合で生まれる独特の緊張をうまく制御し、1時間以上にも及ぶ競技の中で、集中力を保ち続ける強いメンタルが必要であると思いました。

まず技術面を改善するために、練習内容を記録するノートを作り、練習における目標や改善したい具体的な技術、練習の結果得られた改善点などを記入しました。射撃のフォームには何十箇所と変更できる場所があるのですが、焦らず一つ一つの変更を試みては書き留めるという作業をしました。次に、メンタル面を強くするため、毎年部活の行事として行われるメンタルマネージメントの資料を幾度となく読み返し、理論に基づいたイメージトレーニングを繰り返し行いました。

これらの作業は果てしなく続く長い道のりのように感じられました。しかし、一つ一つ着実に積み重ねていった事が、今日の実績に繋がったのだと思います。

私はこの賞を頂いた試合を最後に、部活を引退致しました。今後は部活動に選手として参加することはできませんが、4年間の活動を通して私が得た経験を先輩たちに伝えることで部活動の更なる活性化と発展に貢献していきたいです。

ほりべ むねひさ
理学部物理学科4年
1985年生まれ 岐阜出身

[団体の部]

航空部 全国大会団体初優勝！

航空部 長江 尚紀



着陸する名大ディスカス（全国大会出場機）

今回、体育会会長表彰に航空部が選ばれたことを、部の一員として大変名誉に感じています。今回の受賞は、訓練を支え、技術向上に寄与してくださったOB、OGの方々、また新機材の導入を進めてくださった大学の方々の多大なるご協力のおかげだと受け止めています。部員と共にこの喜びを分かち合いたいと思います。

航空部は、今年の3月に埼玉県で行われた第47回全日本学生グライダー競技選手権大会において、団体優勝することができました。選手層の厚い関東の強豪校とは、練習量、機材共に劣っているだけでなく、いつも練習していないアウェーで戦うという大きなハンデを抱えていました。しかし、選手の事前の十分な情報収集とOBの方々の力強いサポートで長年の悲願を達成することができました。

今年も全国大会の予選を通過し、3月の本戦に出場することが決定しています。二連覇に向けて選手、サポートする部員一同、一丸となって頑張りますので、応援よろしくをお願いします。

ながえ なおき
工学部物理工学科3年
1987年生まれ 岐阜県出身

平成19年度名古屋大学体育会会長表彰式
受賞者及び受賞団体のことば

[団体の部]
舞研は最高です
舞踏研究会 江口 遼



西日本モダン戦 決勝

今回、体育会会長表彰を受賞したわけですが、受賞に至るまでとても多くのことがありました。学生会館で行う正規練習はもちろん、正規練習がない時も、できる限り学生会館に行くようにしてきました。学生会

館にいるときは、自分の練習だけでなく、教えることも精一杯行い、それにより自分の理解が深まることもありました。さらに、レッスン場にも通い、さらなる技術の向上に務めてきました。レッスン場では、集中して練習をし、いろいろな技術を自分のものにしようと努力してきました。会長表彰の受賞に至る成績を残すことができた理由は、単に自分の技術だけではありません。同じ部活の仲間の力強い応援に支えられて、自分の実力以上の演技ができたことも理由の一つだと思います。試合会場で聞くみんなの応援にはいつも力をもらいました。みんなの応援でこんなにも力が湧いてくるのは、自分はほんとうにこの部活が好きだからだと思います。もうすぐ部活を卒業してしまうのですが、後輩に最高の演技を見せることができ、満足しています。卒部後も、この部活の一員として後輩のあこがれとなるような人物でありたいと思います。そして、たまには学生会館に顔を出し部活の人たちと接していきたいと思っています。私は、この部活にいたことがほんとうに幸せでした。

えぐち りょう
工学部物理工学科
1988年生まれ 愛知県出身

[団体の部]
飛躍の1年
陸上競技部 安田 理香



七帝戦 100m 走

私たち名古屋大学女子陸上競技部にとって、今年は一生涯忘れられないビックイヤーになりました。『七大戦6連覇』と『全日本大学女子駅伝初出場』、この2つの偉業を成し遂げたからです。

今年の七大戦はとても厳しい試合でした。昨年まで5連覇中の我が部でしたが、今年は6連覇へのプレッシャー、選手不足、他大学の戦力アップといった不安が重なり、簡単に勝てる状況ではありませんでした。

しかし、「私たちは強い。自分の力を100%出し切り、最後まで諦めなければ、必ず結果は出る。」その気持ちを胸に、女子部員11人全員が、選手として、サポート役として、自分のやるべきことを精一杯やりました。その強い気持ちが、6連覇という素晴らしい結果につながったのです。誰一人欠けてもだめだった、まさに全員で勝ち取った6連覇でした。来年も厳しい戦いになるとは思いますが、7連覇を目標に、女子部全員で努力を重ねていくつもりです。

全日本大学女子駅伝は、以前から大きな目標としていた試合でした。数年前までは、私立の強豪校に人数も地力も及ばない状況が続きましたが、メンバー全員が「全女に出場したい」という強い意志のもと、必死に練習をしました。その結果、東海地区予選を勝ち抜いて、仙台への切符を掴み取ることができました。本戦当日では、全国の厚い壁に阻まれ、襷を最後まで繋げることができませんでしたが、この悔しさを来年晴らすべく、今後もチーム一丸となり、さらなる高みに向かって走り続けようと思います。

やすだ りか
理学部生命理学科4年
1985年生まれ 富山県出身

「平成19年度まちとすまいの集い」を開催

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科は、12月15日(土)、「平成19年度まちとすまいの集い」を環境総合館レクチャーホールにおいて開催しました。

今回、この催しをなごや環境大学の連携講座とすることでより開かれた形とし、地域市民や建築関係者などとともに、「地球温暖化と都市・建築」をテーマに地球環境問題



パネルディスカッションの様子

について建築家・建築技術者の果たすべき役割と責任を視点に幅広く議論を行いました。

催しの第一部では、同研究科建築学教室の丸山一平准教授、村山顕人准教授及び奥宮正哉教授から、それぞれの専門分野における地球温暖化対策の取り組み、最先端の技術や試みなどが幅広く紹介されました。

さらに第二部では、地球科学の観点から地球環境問題に取り組んでいる高野雅夫同研究科准教授（地球環境科学専攻）より、北極圏を例に、地球温暖化が生態系・人間生活に及ぼす影響が具体的に紹介されるとともに、環境問題解決を担う人材の育成や教育の重要性について指摘されました。続いて、小松 尚同研究科准教授の進行のもと、高野准教授と第一部の講演者によるパネルディスカッションが行われました。ここでは参加者との質疑応答を含め、問題解決に向けた技術開発の方向性から地球環境問題の教育のあり方など、様々な問題について活発な意見交換が行われ、地球温暖化対策を中心とした幅広い地球環境問題について知見を深めることができ、有意義な催しとなりました。

名古屋の外国人留学生・研究者のための地震防災研修会を開催

●大学院環境学研究科、留学生センター

大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センターと留学生センターは、11月22日(木)、名古屋の外国人留学生・研究者のための地震防災研修会を開催しました。この研修会は、1995年から年に2回ずつ、学内の関係組織が協力して行っているものです。

研修会ではまず、地震について学ぶことは、地球の小さなささやきや大きな叫びに耳を傾けそれを理解し予測する



研修会の様子

という、地球との共生を学ぶことであり、共生の中で現代的な方法で地震に対処することが必要だという話がありました。山岡耕春環境学研究科教授の講義では、阪神大震災やインドネシア津波などの実際の映像や、建物の揺れのシミュレーション映像、東海地域の強震動予測地図などを見ながら、地震について知識を得て想像力を駆使し対処する大切さを学びました。非常用準備品や避難所などの実践的な情報の紹介もあり、参加者からは住居の強度や地域の外国人向け研修等について多くの質問がありました。

今回は学内の学生や研究者を中心に約45名の参加者があり、会場となったCALEフォーラムは満員となりました。また、他地域からの参加者もあり、各地で同様の研修の必要性が感じられていることがわかりました。

言語や文化の違いが情報弱者・災害弱者を生むことのないようにすることはもちろん、それに加えて、将来世界各地でリーダーとして活躍する学生や研究者たちに、震災の知識を役立ててもらうことも、研修会では視野に入れました。彼らがそれぞれの国や地域の特性に合った防災の啓発をしていくことを期待し、今後は中級・上級コースについても実施を予定しています。

三重県大紀町錦地区において津波被災交流会を開催

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科は、12月6日(木)、三重県大紀町と協力して、同町錦地区において津波被災交流会を開催しました。これは独立行政法人科学技術振興機構の地域科学技術理解増進活動推進事業「機関活動支援」に採択された「スマトラ津波被災交流と緊急地震情報による津波防災意識の向上」の一環として開催されたものです。

錦地区は、昭和19年12月7日に発生した東南海地震による津波によって、死者64人という大きな被害をこうむりました。近年、津波避難タワーを建設するなど、独自の津波避難対策を推進しています。今回は若い世代が実際の津波

被災体験を知ることを目的に、2004年12月のインド洋巨大津波で大被害を受けたインドネシア国バンダアチェから2名の学生を招き、小学校および中学校で体験談を語ってもらいました。講演には本学の研究者が日本画家と協力して製作を進めている防災教材も活用し、講演後には多くの質問も出ました。

翌7日(金)には、毎年行われている津波避難訓練にバンダアチェからの2名の学生たちが参加しました。地区の一般家庭に外国人が滞在しているという設定で訓練を行い、津波警報を伝える防災無線のサイレンを合図に、町内の高台に設置された避難所へ徒歩で避難しました。また、警報が解除されるまでの間、高台にとどまることや、避難所の非常備蓄品に何が備えられているかなど、津波常襲地帯の知恵を実践的に学びました。



錦中学校における津波被災交流会の様子



津波避難訓練に参加するバンダアチェの学生たち

市民公開講座「知っておきたい甲状腺の病気」を開催

●環境医学研究所

環境医学研究所は、12月9日(日)、野依記念学术交流館において、中日新聞社との共催により、市民公開講座「知っておきたい甲状腺の病気」を開催しました。

この講座は、一般にはあまり知られていない甲状腺の病気をテーマとして取り上げ、市民向けに紹介しようとするもので、当日は100名を超える受講者がありました。開講

にあたり児玉環境医学研究所長からあいさつがあった後、神部福司同研究所准教授による「甲状腺とは？そしてその働き」と題する講演を皮切りに、村田善晴同研究所教授による「大人の甲状腺の病気にはどのようなものがあるか」、今井常夫医学部附属病院乳腺・内分泌外科科長／講師による「甲状腺にできる腫瘍（特に癌）についての正しい知識」、山下俊一長崎大学医歯薬学総合研究科附属原爆後障害医療研究施設教授による「チェルノブイリ原発事故から20年：甲状腺癌の実態」及び浜田昇すみれ病院院長による「『体調がすぐれない?』-あなたも甲状腺の病気かも」と題する講演があり、その後のパネルディスカッションでは、活発な質疑応答が行われました。



活発な質疑応答が行われたパネルディスカッション

先端技術公開セミナーを開催

●大学院情報科学研究科

大学院情報科学研究科は、11月19日(月)、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー3階ベンチャーホールにおいて、名古屋大学・NTT・NTT西日本連携協議会との共催で、先端技術公開セミナーを開催しました。

セミナーは、末永康仁情報科学研究科教授の司会により進められ、古賀同研究科長によるあいさつの後、NTTコ



講演する外村 NTT コミュニケーション科学基礎研究所長

ミュニケーション科学基礎研究所所長の外村佳伸氏による「新しいコミュニケーション環境をめざして」と題した講演が行われました。

インターネットの時代となり、私たちはコミュニケーションとは情報を伝えることだといった考え、その延長上で機能や表現メディアを豊かにすることを追い求めがちです。それでも電話に代表されるコミュニケーション手段は、人が生で発し、受ける手段としてまだまだ健在です。ありのままの人間を基本とした環境にあえて立ち帰った未来のコミュニケーション環境「伝心伝和」を模索する必要があり、その鍵となるのは「場のコミュニケーション」および「環境知能」という概念です。講演では、こうした考えをもとに同研究所において鋭意研究が進められている新しいコミュニケーション方式や方向指示感覚を生む携帯端末など様々な研究の成果が紹介されました。

本セミナーには、本学教員、学生のみならず、企業からも参加者があり、約60人が熱心に聴講しました。

「ニセ科学・情報を見る学問の眼」シンポジウムを開催

●情報文化学部

情報文化学部は、12月15日(土)、IB電子情報館015教室において「ニセ科学・情報を見る学問の眼」シンポジウムを開催しました。

佐野情報文化学部長のあいさつの後、菊池 誠大阪大学サイバーメディアセンター大規模計算科学部門教授が「科学とニセ科学:科学者の立場から」と題し、科学を装ったニセ科学が世の中に蔓延し社会問題になっていること、科学者は何を行うべきかについて報告がありました。続いて、菊池 聡信州大学人文学部准教授が「人の心理システムが生み出す疑似科学」という題目のもとに、人はわかりやすい答えを出そうという心理システムを持っていること、また批判的思考が重要であるとの指摘がありました。

伊勢田哲治情報科学研究科准教授は「哲学だって役に立つ(かもしれない) - 科学哲学から見たニセ科学と科学の境界 -」と題して、創造科学を題材に、科学における反証可能性、また哲学者が疑似科学にどのように関わっていくかについて報告がありました。最後に、戸田山和久情報科学研究科教授の司会のもと、社会に対して科学者、大学関係者が何を行なうべきかなど、非常に活発な議論が行なわれました。

同シンポジウムには、一般市民の方を含め、100名を超える参加者があり、情報文化学部の教育・研究の特徴が社会に広く知られる機会となりました。



講演をする菊池 誠 大阪大学教授



講演をする菊池 聡 信州大学准教授



シンポジウムの様子

JICA 国別研修「ウズベキスタン抵当法解説書作成」を実施

●大学院法学研究科、法政国際教育協力研究センター

大学院法学研究科と法政国際教育協力研究センターは、11月14日(水)から20日(火)の間、国際協力機構(JICA)の委託を受け、国別研修「ウズベキスタン抵当法解説書作成」を実施しました。本研修は「ウズベキスタン抵当法解説書」の出版を目標とするJICAウズベキスタン事務所の事業の一環として行われており、国内支援業務を受託して



研修の様子

いる本学法学研究科が受け入れたものです。

今回の研修は、ウズベキスタン司法省から立法部長をはじめとする4名の立法部職員が研修員として来日し、加えてJICAウズベキスタン長期専門家(ウズベキスタン在住)、ウズベキスタン法整備支援受託事業国内支援委員会メンバーを交えてディスカッション形式で行われました。一方的な講義とは異なり深い議論をする協同作業であることから研修員にも高い評価を得ました。

JICA 国別研修「イラン法整備支援」を実施

●大学院法学研究科、法政国際教育協力研究センター

大学院法学研究科と法政国際教育協力研究センターは、11月25日(日)から12月8日(土)の2週間、国際協力機構(JICA)の委託を受け、国別研修「イラン法整備支援」を実施しました。この研修は2004年度から5年間の計画で開催しており、イランの司法関係者を日本に招聘し、日本の法制度の学習を通じて、イランにおける法制度の整備に資



研修の様子

することを目的とするものです。

この研修の5年間の共通テーマは、「司法はいかに国民の信頼を獲得するか?」であり、4年目である本年度は、「公務員の汚職対策」に重点を置いたもので、参加者は司法次官を初め、裁判官、検査官、捜査官、検事等10名でした。

研修プログラムとして、アジアの中で汚職対策の経験のあるタイ、インドネシア等の国々の汚職対策について講義を受け、国連アジア極東犯罪防止研修所、人事院、最高裁判所、名古屋地方検察庁、愛知県警、名古屋地方裁判所、笠松刑務所等の現地見学を行いました。また、司法機関とは異なる立場で、汚職対策に取り組んでいるオンブズマンの役割についての講義や、マスコミの現場を知るために中日新聞社を訪問し、編集部の見学、司法記者の講義、社会部幹部との懇談等、数多くのプログラムを経験しました。

各講義、訪問箇所では積極的に多くの質問が出る充実した研修となりました。

第28回附属図書館研究開発室オープンレクチャーを開催

●附属図書館

附属図書館研究開発室は、11月19日(月)、同館5階多目的室において、第28回オープンレクチャーを開催しました。これは、同室が掲げるハイブリッド図書館の研究開発及び学術情報流通を主なテーマとして、平成14年度から学内外の方を対象に開催しているもので、今回は、伊藤大輔文学研究科准教授(研究開発室兼任室員)が、「讃岐金刀比羅



オープンレクチャーの様子

宮の信仰と絵画」と題した講演を行いました。

「金毘羅さん」の愛称で広く知られている讃岐金刀比羅宮は、江戸時代においても伊勢参りと並び、庶民の巡礼目的地で、地元高松、丸亀の大家を中心に各地の大名の信仰をも集め、將軍家、ひいては皇室とも関係を持っていました。こうした幅広い信仰の結果、金刀比羅宮には様々な文物が奉納され、現在に伝えられています。

今回の講演では、そのような文化財の中から、18世紀の京都画壇を代表する画家である、円山応挙の表書院の襖絵と、伊藤若冲の奥書院の障壁画が紹介されました。このうち円山応挙は、火災でアトリエを焼失したのち、水を好んで画題とする傾向があり、表書院山水の間の画は、庭園の山水と連動させようとした興味深い作例であることが紹介されました。また、プライベートスペースに描かれた伊藤若冲の画は、格子状模様を徹底的にあしらった、きわめて斬新な作例であることが紹介されました。

講演後の質疑応答では、絵画は見る位置や視線によって、室内にいる人々の社会的な関係を表現する機能を持つ、などの興味深い指摘がなされ、貴重なレクチャーとなりました。

第10回附属図書館友の会トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催

●附属図書館

附属図書館友の会は、12月7日(金)、同館5階多目的室において、トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催しました。これは、同館における市民、学生および図書館職員などの交流を軸に、図書館関連情報の提供、図書館の社会連携・貢献活動の支援などを旨とする友の会が主催するもので、平成17年度から、年4回、友の会会員だけでなく、広く学



「ふみよむゆふべ」の様子

内外の方を対象に開催し、書物の本文(テキスト)を「読む」ことを主眼としています。

10回目となる今回は、山口庸子国際言語文化研究科准教授が「ユダヤ人・女性・詩人—エルゼ・ラスカー=シューラーの手紙」と題した講演を行いました。

まず、ラスカー=シューラー(1869-1945)の生涯を、写真や図版、当時の雑誌等を駆使して、多くのジャンルでの芸術活動、国際性、人間関係の豊かさから振り返り、奇人・変人としてのラスカー=シューラー、エキゾチックで情熱的な「ユダヤ人女性」、ナチスによる迫害・亡命など、受容の過程で形成されてきた彼女のイメージを明らかにしました。そのイメージを踏まえ、彼女が多用したメディアである手紙に注目しました。非常に複雑で、しかも遊び心に満ちた書簡体小説『ノルウェーへの手紙』を読み解きながら、ラスカー=シューラーの「遊戯の詩学」の魅力を探っていきました。

質疑応答も交え、ラスカー=シューラーを主人公にした映画のさわりの紹介もあり、参加者からは、これからの人生で彼女の生き方を少しでも学んでいきたい、未知の世界を覗かせていただいた等の感想が寄せられました。

地球教室「ナゴヤで化石を探そう！！」を開催

●博物館

博物館は、12月1日(土)、2日(日)の両日、名古屋駅・栄地区において、地球教室「ナゴヤで化石を探そう！！」を名古屋市科学館との共同主催により開催しました(協力：蒲郡市生命の海科学館、協賛：ちゅうでん教育振興財団)。小学3年生～



何が見えるかな？ ビルの壁面で化石を探す参加者(新栄にて)

中学3年生とその保護者を対象としたこのイベントには157名の応募があり、抽選で40名が参加しました。

初日は、本学において約2時間、色々な貝の断面を観察しながら「断面から立体を想像する練習」を行いました。2日目の午前には、名古屋

駅地区で建物の壁に入っている化石を観察し、前日の練習をもとに“化石を探すコツ”を学びました。その後、午後には栄地区に移動し、4つのビルをチェックポイント(CP)とした『親子対抗スタンプラリー』を行いました。各CPでは、CPスタッフの指令をクリアすればスタンプをもらうことができます。CPの見事な化石や地層を前に、あれこれ頭を悩ませる親子連れの姿が見られ、通行人を巻き込んでの化石探しが繰り広げられました。

その後、中部電力東桜会館へ移動し、地球教室のまとめを行いました。ここでは、ビルの内外壁一面に、無数のアンモナイトや石灰藻類等の化石が観察できます。その様子を見て参加者からは一斉に歓声が上がり、大変な興奮と熱気のなか、次々と質問が寄せられました。

博物館では、今後もこのような親子対象の自然体験教室を実施していく予定です。

平成19年度地域貢献特別支援事業「鳥っておもしろい」を開催

●博物館

博物館は、11月17日(土)、平成19年度地域貢献特別支援事業の一環として「鳥っておもしろい」を開催しました。

まず、午前中に一般市民の方々30名が参加してキャンパス探鳥会を行い、2時間半ほどかけて東山キャンパスを巡りました。図書館前ではハクセキレイを、鏡ヶ池ではカイツブリの子育てを見ることができ、その他にもウグイス、



午後の実習の様子

コゲラ、メジロ、アオジなどを観察することができました。当日は天候に恵まれ、散策の途中ではモミジバフウの紅葉も楽しみました。

午後には、博物館野外観察園セミナーハウスで「骨からみるトリ」の実習を行いました。トリの骨の特徴などの説明のあと、参加者は、博物館所蔵のニワトリ等の骨格標本を実際に手にとって、形や重さを体験しました。飛ぶことに適応した骨、餌による嘴の違いなどを学習し、さらに、最近明らかになっているトリと恐竜との共通点について解説を聞き、興味が増した様子でした。

流鏝馬デモンストレーションを開催

●博物館、教育学部附属学校、和式馬術部



遠的体験の様子

11月4日(日)午後、本学和式馬術部、博物館、教育学部附属中・高等学校の共催による流鏝馬デモンストレーションが、附属学校のグラウンドで行われました。附属高等学校の矢木 修教頭のあいさつ、和式馬術部の坂下由衣主将による木曾馬の解説の後、一般市民や本学関係者など300人を超える見学者を前に、和式馬術部の部員が流鏝馬の技を次々と披露しました。

また、静止した木曾馬の上から60メートル先の的を射る遠的「平家物語、那須与一体験会」には、附属中学校の弓道部員が何人もチャレンジし、馬上から矢を射る難しさと人馬一体の重要性を体感していました。また、長蛇の列ができた体験乗馬や体験流鏝馬に参加した多くの市民からは、こうした木曾馬とのふれあいや日本古来の文化が体験できるイベントを、毎年開催してほしいという声が多く聞かれました。

キャンパス探鳥会を開催

●博物館



キャンパス探鳥会の様子

博物館は、12月8日(土)、キャンパス探鳥会を開催しました。一般市民の方々や本学学生を含めた43名が参加し、東山キャンパスのルートマップを手にして、見つけた野鳥の種類を記入していきました。中央図書館前では、ウグイス、ハクセキレイ、また、工学部2号館前のケヤキの枝では、メジロ、シジュウカラを観察しました。ついで鏡ヶ池に移動し、カイツブリ、コサギ、キンクロハジロ、ゴイサギの成鳥と幼鳥など水辺のトリを観察しました。その後、一行はキャンパスの東部に移動し、農学部圃場の南側の二次林とその付近では、ジョウビタキ、ヒヨドリ、コゲラ、メジロ等を確認し、野鳥の生息環境と野鳥の種類について理解を深めました。

附属農場動物塚において動物慰霊祭を実施

●大学院生命農学研究科



動物塚前で献花を行う参加者



動物塚の全景

平成19年度動物慰霊祭が、12月6日(木)、大学院生命農学研究科附属農場動物塚において、教職員、大学院学生、学部学生等120名余りの参列のもと、実施されました。

同慰霊祭は、昭和50年12月8日、当時の農場長の宗像 桂農学部教授の尽力で附属農場に建立された動物塚で初めて執り行われて以来、毎年12月8日前後に実施されているものです。

実施にあたり、松田同研究科長が、動物慰霊祭の歴史と教育・研究に供された多くの動物に対し感謝の言葉を述べ、各層代表者による「供穀の儀」及び「献花の儀」が執り行われました。続いて、参加者全員による献花が行われ、最後に、動物実験委員会委員長代理の堀尾文彦同研究科教授が、過去1年間に教育・研究に供された合計2万を超える動物に対し、慰霊の言葉を述べました。

10. 4 ケンタッキー大学副学長

工学研究科と学術交流協定を締結しているケンタッキー大学の副学長が米国ケンタッキー州の訪日視察団の一員として来日の際、本学を訪問され、本学との学術交流を一層促進することについて意見交換が行われました。



10. 9 陝西師範大学長等

中国・陝西師範大学と協力関係にある我が国の大学との相互理解を深めることを目的として来日した機会に、本学を訪問され、文学研究科との共同シンポジウムの開催について打合せが行われました。



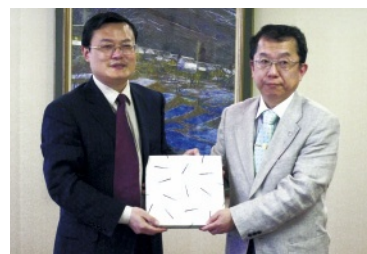
10.10 ノースカロライナ州フェイン商務長官ミッション団

平野総長が9月にノースカロライナ州を訪れた際に面談したフェイン商務長官のミッション団が、国際産学連携について意見交換するため、本学を表敬訪問されました。夕刻、州主催のパーティが開催され、特に名古屋大学との関係について親しく懇談がなされました。



10.23 南京大学副学長

本学と全学間の学術交流協定を締結している南京大学の副学長が訪問され、共同研究、共同セミナーの実施について意見交換が行われました。



11.15 重慶科技学院校務委員会主任等

重慶科技学院校務委員会主任ほか7名が本学との学術交流の可能性について意見交換を行うとともに、留学生センターを訪問されました。



11.27 ブリティッシュ・カウンシル西日本地区代表

ブリティッシュ・カウンシル西日本地区代表が就任の挨拶及び国際化・国際交流に関する施策、今後の方針等について意見交換するため、訪問されました。



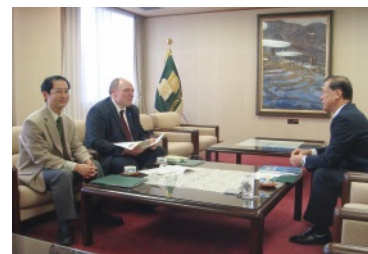
12. 3 上海市教育委員会産学交流団

上海市教育委員会産学交流団が本学と上海市所在の大学との産学連携及び国際交流について意見交換するため、本学を訪問されたほか、中国から本学に留学している学生と共に、トヨタ自動車堤工場を見学されました。



12. 4 フライブルク大学教授

平野総長が本年7月に開催されたフライブルク大学550周年記念式典に参加し、その際に併せて開催されたシンポジウムの議長を務められたフライブルク大学のリュウエ教授が表敬訪問されました。



12. 4 カセサート大学理学部副学部長等

カセサート大学理学部副学部長及び同学部の学生が、生物学及び医学の研究の一環として理学研究科、生命農学研究科、医学系研究科を訪問されました。

12.13 木浦大学校副総長等

木浦大学校企画協力副総長及び評議会事務局長（日語日文学科長）が国立大学法人化以降の国際交流及び地域貢献に係る取組みについて本学の実状を調査するため、訪問されました。



受賞者一覧

教員

受賞日	受賞名	所属・職名	受賞者	備考
H19. 4.20	日本コンピュータ外科学会 講演論文賞	大学院工学研究科教授	生田 幸士	他2名と連名
H19. 5.31	第35回セメント協会論文賞	大学院環境学研究科助教	黒川 善幸	
H19. 8. 4	2007 NTC DISTINGUISHED SERVICE AWARD	大学院工学研究科教授	福田 敏男	
H19. 8.22	第1回 International Conferences on Representations of Algebras (ICRA) Award	大学院多元数理科学研究科准教授	伊山 修	
H19. 9. 5	2006 Goodie Best New Application Paper Award	大学院工学研究科教授	福田 敏男	
H19. 9.16	日本応用数学会論文賞	大学院工学研究科准教授	山本 有作	
H19. 9.19	日本金属学会 奨励賞	大学院工学研究科助教	巽 一徹	
H19. 9.19	計測自動制御学会 フェロー	大学院工学研究科教授	早川 義一	
H19. 9.19	計測自動制御学会 論文賞	大学院工学研究科教授	福田 敏男	
H19. 9.19	日本金属学会 学術貢献賞	大学院工学研究科教授	桑原 守	
H19. 9.19	Thomson Scientific Research Front Award 2007	エコトピア科学研究所 客員教授	岡本 佳男	八島栄次（大学院工学研究科教授）と連名 詳細は本誌174号 p. 8 参照

受賞者一覧

受賞日	受賞名	所属・職名	受賞者	備考
H19. 9.20	13th International Symposium on Laser-Aided Plasma Diagnostics, Outstanding Preposter-Poster Award	大学院工学研究科准教授	佐々木浩一	
H19. 9.21	第60回コロナウイルスおよび界面化学討論会ポスター賞	大学院工学研究科助教	片桐 清文	河本邦仁 (大学院工学研究科教授)、中村雅人 (大学院工学研究科 M2)、他 2 名と連名
H19. 9.21	日本物理学会 若手奨励賞	大学院工学研究科准教授	岸田 英夫	
H19. 9.22	日本岩石鉱物鉱床学会研究奨励賞	大学院環境学研究科日本学術振興会特別研究員	水上 知行	
H19. 9.25	日本生物工学会 第15回生物工学論文賞	大学院工学研究科教授	飯島 信司	
H19. 9.25	日本生物工学会 第15回生物工学論文賞	大学院工学研究科助教	西島 謙一	
H19. 9.25	日本放射化学会賞 奨励賞	年代測定総合研究センター助教	小田 寛貴	
H19. 9.26	The 3rd Asian Pacific Conference on Theoretical & Computational Chemistry The Best Poster Award	大学院情報科学研究科研究員	優 乙石	長岡正隆 (大学院情報科学研究科教授) と連名
H19. 9.27	平成19年度 錯体化学会 研究奨励賞	大学院理学研究科助教	上野 隆史	
H19. 9.27	日本医用マンスペクトル学会 松本勇賞	医学部附属病院准教授	丹羽 利充	
H19. 9.27	日本機械学会 機械力学・計測制御部門部門貢献賞	大学院工学研究科准教授	井上 剛志	
H19.10. 8	日本国際経済学会 「小島清」賞	大学院経済学研究科教授	多和田 眞	
H19.10. 1	アメリカ物理学会フェロー	大学院多元数理科学研究科教授	木村 芳文	
H19.10. 9	英国王立化学会 Pioneers of Miniaturization Prize 2007	大学院工学研究科准教授	渡慶次 学	
H19.10.15	日本塑性加工学会 優秀論文講演奨励賞	大学院工学研究科助教	久米 裕二	
H19.10.21	日本繁殖生物学会学術賞	大学院生命農学研究科准教授	大蔵 聡	
H19.10.25	2007年度グッドデザイン賞	大学院環境学研究科教授	福和 伸夫	
H19.10.26	日本機械学会 創立110周年記念功労者表彰	大学院工学研究科教授	酒井 康彦	
H19.10.26	日本機械学会 創立110周年記念功労者表彰	大学院工学研究科教授	田中 英一	
H19.10.26	日本機械学会 創立110周年記念功労者表彰	大学院工学研究科教授	大野 信忠	
H19.10.26	日本機械学会 創立110周年記念功労者表彰	大学院工学研究科教授	新美 智秀	
H19.10.26	日本機械学会 創立110周年記念功労者表彰	大学院工学研究科教授	佐藤 一雄	
H19.10.31	IEEE /RSJ2007 In recognition and dedication to the International Conference on Intelligent Robots and Systems	大学院工学研究科教授	福田 敏男	
H19.10.31	IMPRES 「Excellent Poster Presentation Award」	エコトピア科学研究所准教授	小林 敬幸	井上 哲 (株式会社デンソー)、井上誠司 (株式会社デンソー) と連名
H19.11. 5	The 15th International Conference on Computers in Education (ICCE2007) Outstanding Poster Presentation Award	大学院情報科学研究科助教	小尻 智子	米谷 昭 (株式会社デンソー、平成18年度本学修了生)、渡邊豊英 (大学院情報科学研究科教授) と連名
H19.11. 7	電子スピンスイエンズ学会 奨励賞	大学院理学研究科准教授	三野 広幸	
H19.11. 9	土木学会 海岸工学論文賞	大学院工学研究科准教授	川崎 浩司	他 1 名と連名
H19.11. 9	土木学会 海岸工学論文賞	大学院工学研究科助教	李 光浩	水谷法美 (大学院工学研究科教授) と連名
H19.11.12	第79回日本遺伝学会岡山大会 Best Paper 賞	大学院理学研究科助教	久原 篤	
H19.11.15	鋼構造協会第15回鋼構造年シンポジウム2007 アカデミーセッション優秀発表賞	大学院環境学研究科助教	石川 敏之	
H19.11.16	第32回鳥類内分泌研究会 若手研究奨励賞	大学院生命農学研究科日本学術振興会特別研究員	中尾 暢宏	吉村 崇 (大学院生命農学研究科准教授)、小野ひろ子 (大学院生命農学研究科 M2) 他18名と連名
H19.11.14	IEEE Best Paper Award in 2007 International Symposium on Micro-NanoMechatronics and Human Science	大学院工学研究科助教	伊藤伸太郎	福澤健二 (大学院工学研究科教授)、張賀東 (大学院工学研究科助教)、他 1 名と連名
H19.11.14	International Symposium on Beamed Energy Propulsion	大学院工学研究科教授	佐宗 章弘	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	所属・職名	受賞者	備考
H19.11.14	Best Paper Award (MHS2007)	大学院工学研究科教授	福田 敏男	丸山央峰 (大学院工学研究科研究員)、伊藤将紘 (大学院工学研究科 M1) と連名
H19.11.14	Best Paper Award (MHS2007)	大学院工学研究科教授	福田 敏男	池田誠一 (大学院工学研究科研究員)、内田智之 (大学院工学研究科 D3)、大浦裕就 (大学院工学研究科 M1) と連名
H19.11.15	放電学会創立50周年記念功績賞	エコトピア科学研究所教授	大久保 仁	
H19.11.15	第15回鋼構造シンポジウム2007アカデミーセッション 優秀発表賞	エコトピア科学研究所研究機関研究員	判治 剛	舘石和雄 (エコトピア科学研究所教授) と連名
H19.11.17	日本機械学会 流体工学部門フロンティア表彰	大学院工学研究科教授	酒井 康彦	
H19.11.20	第21回日本 IBM 科学賞	大学院工学研究科教授	石原 一彰	詳細は本誌175号 p.10参照
H19.11.22	溶液化学研究会 奨励賞	大学院工学研究科助教	山口 毅	
H19.11.24	2007年度 Merck-Banyu Lectureship Award (MBLA)	大学院理学研究科准教授	伊丹健一郎	
H19.12. 6	日本燃焼学会 論文賞	大学院工学研究科教授	成瀬 一郎	他 1 名と連名
H19.12. 6	日本放射線安全管理学会功労賞	名誉教授	西澤 邦秀	

事務職員・技術職員

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H19.10.18	全国共同利用情報基盤センター顕彰賞	情報連携基盤センター技術職員	山本 哲也	
H19.11.29	大学等環境安全協議会 技術賞	エコトピア科学研究所技術職員	松浪 有高	
H19.12. 7	日本放射線安全管理学会第6回学術大会最優秀ポスター賞	アイソトープ総合センター技術職員	近藤 真理	杉本勇二 (株式会社イング)、小島 久 (アイソトープ総合センター技術専門職員)、柴田理尋 (アイソトープ総合センター教授)、西澤邦秀 (名誉教授) と連名

学生

受賞日	受賞名	所属・学年	受賞者	備考
H19. 3.26	日本化学会第87回春季年会「学生講演賞」	大学院理学研究科 D3	沖本 治哉	
H19. 4. 7	Best Student Oral Presentation Awards	大学院工学研究科 D2	竹内和歌奈	
H19. 6. 5	みずほ学術振興財団 第48回懸賞論文経済の部 1等	大学院経済学研究科 D3	土井 康裕	
H19. 6.14	日本航空宇宙会 航空宇宙シュミレーション技術シンポジウム2007 学生プレゼンテーション賞	大学院工学研究科 M1	関谷 洋平	
H19. 6.14	日本保健物理学会 第41回研究発表会ポスターセッション優秀賞	大学院工学研究科 M2	平尾 茂一	山澤弘実 (大学院工学研究科准教授)、森泉 純 (大学院工学研究科助教)、他 1 名と連名
H19. 8.30	日本熱電学会 講演奨励賞	大学院工学研究科 M2	新名 雅俊	
H19. 8.31	BEST Paper Awards for young Researchers	大学院工学研究科 D2	岩崎 正博	
H19. 9. 3	Best Poster Award R'07 Davos	大学院工学研究科 M2	今泉 晴貴	板倉 剛 (エコトピア科学研究所特任助教)、笹井 亮 (大学院工学研究科講師)、伊藤秀章 (エコトピア科学研究所特任教授) と連名
H19. 9. 6	FIT 論文賞	大学院情報科学研究科 D3	謝 旭珍	平田富夫 (大学院情報科学研究科教授)、柳浦睦憲 (大学院情報科学研究科准教授)、小野孝男 (大学院情報科学研究科助教) と連名
H19. 9.13	電気学会優秀論文発表賞	大学院工学研究科 M2	南形 厚志	
H19. 9.13	電気学会電力・エネルギー部門大会ヤングエンジニアポスターコンペティション	大学院工学研究科 M2	久田 真史	
H19. 9.18	第9回インターナショナルサマーシンポジウム最優秀講演氏賞	大学院工学研究科 D3	アハメド カマル	中村 光 (大学院工学研究科教授)、国枝 稔 (大学院工学研究科准教授)、上田尚史 (大学院工学研究科助教) と連名
H19. 9.18	Japan Society of Civil Engineers Certificate of Excellence	大学院工学研究科 D2	廉 慶善	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	所属・学年	受賞者	備考
H19. 9.20	日本金属学会 2007年秋期講演大会 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M1	久保 陽介	佐々木勝寛 (大学院工学研究科准教授)、 黒田光太郎 (大学院工学研究科教授) と 連名
H19. 9.26	日本生物工学会 優秀学生発表賞	大学院工学研究科 M2	児玉 大介	
H19. 9.27	第7回アジアバイオセラミックスシンポジウム 若手研究者賞	大学院工学研究科 M1	萩尾 健史	
H19. 9.27	平成19年度 第57回錯体化学討論会 ポスター賞	大学院理学研究科 M2	藤城 貴史	
H19. 9.27	平成19年度 第57回錯体化学討論会 ポスター賞	大学院理学研究科 D3	越山 友美	
H19.10. 6	日本魚類学会論文賞	平成18年度本学修了生	李 霞	Prachya Musikasinthorn (カセサート大学 講師)、熊澤慶伯 (大学院理学研究科講師) と連名
H19.10.13	ITS 世界会議 Best Scientific Paper 賞学生部門 第2位	大学院環境学研究科 D3	金森 亮	
H19.10.26	質量分析学会同位体比部会 最優秀口頭発表賞	大学院環境学研究科 D3	若木 重行	
H19.10.28	第15回衛星設計コンテスト 設計大賞	大学院工学研究科 M1	高塚 直樹	木全敏章 (工学部4年)、米原慧紀 (工学 部4年)、金炯鎮 (工学部4年)、富田昌美 (工学部4年)、中山佳洋 (工学部3年)、 藤井悠太 (工学研究科 M2) と連名
H19.10.30	Student Award in 6th International Symposium on Atomic Level Characterizations for New Materials and Devices '07	大学院工学研究科 M2	上田 浩大	
H19.10.31	IMPRES 「Excellent Poster Presentation Award」	大学院工学研究科 D3	廣田 靖樹	安藤一輝 (大学院工学研究科 M2)、 小林敬幸 (エコトピア科学研究所准教授) と連名
H19.10.31	Outstanding Poster Presentation Award	大学院工学研究科 D1	下岡 里美	
H19.11. 2	第35回東海若手セラミスト懇話会2007年秋期 講演会 ベスト質問賞	大学院工学研究科 M1	楠本 啓貴	松本千誉 (工学部4年) と連名
H19.11. 3	the 12th International Symposium on Advanced Technology and Applications (ATA) Best Poster Award	大学院工学研究科 M2	鳥居 孝洋	朴 海洋 (エコトピア科学研究所研究機関 研究員)、松本幸三 (エコトピア科学研 究所客員准教授)、北川邦行 (エコトピア科 学研究所教授) と連名
H19.11.10	有機合成化学協会東海支部 優秀賞	大学院工学研究科 M1	氏家 識史	
H19.11.11	有機合成化学協会東海支部 VIP 賞	大学院工学研究科 D3	牧 利克	
H19.11.11	第16回国際マイクロロボットメイズコンテスト	大学院工学研究科 M1	米田 裕成	尹正煥 (大学院工学研究科 M1)、 澤田大喜 (工学部4年) と連名
H19.11.17	第30回血栓止血学会学術集会 ポスターセッション優秀賞	大学院医学系研究科 M2	中島 大輔	
H19.11.20	応用物理学会 講演奨励賞	大学院工学研究科 M1	山本 洋	
H19.11.23	「分析中部・ゆめ21」若手交流会 第7回高山フォーラム 優秀発表賞	大学院工学研究科 M1	小林 博治	
H19.11.25	ISETS07 「Excellent Presentation Award」	大学院工学研究科 M1	楠本 啓貴	伊藤 崇倫 (平成18年度本学修了生)、 笹井 亮 (大学院工学研究科講師)、 伊藤秀章 (エコトピア科学研究所特任教授) と連名
H19.11.28	第21回分子シミュレーション討論会 ベストポスター賞	大学院情報科学研究科 D3	高柳 昌芳	岩橋知令 (大学院情報科学研究科 M1)、 長岡正隆 (大学院情報科学研究科教授) と 連名
H19.12. 1	Poster Award at International Symposium on Metallomics 2007	大学院工学研究科 M2	深井 拓	
H19.12.10	土木学会 全国大会第62回年次学術講演会優 秀講演賞	大学院工学研究科 M1	河合 真樹	中村 光 (大学院工学研究科教授)、 国枝 稔 (大学院工学研究科准教授)、 上田尚史 (大学院工学研究科助教) と連名

*受賞者の所属・職名又は学年は、受賞当時

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年11月16日～12月15日]

記事	月日	新聞等名
1 教育学部附属高校女子生徒が06年8月いじめ自殺 本学は「交友関係の行き違いと判断したが、保護者の指摘でいじめと報告した」と説明	11.16 (金) 11.17 (土) 11.20 (火)	毎日 (朝刊) 他2社 読売 朝日 (朝刊)
2 環境医学研究所の医師が、気圧や気温の変化と痛みの関係性を調べるため、愛知医科大学附属病院に誕生した「学術的痛みセンター」の診療に参加	11.16 (金)	朝日 (朝刊)
3 本学と名古屋工業大学が「インテリジェント手術機器研究開発プロジェクト」で、脳神経外科用の医療機械の共同開発を開始 吉田純・医学系研究科教授は「開発成果を実用化につなげるため、地域の製造業とも連携したい」と話す	11.16 (金)	中日 (朝刊)
4 鷺谷威・環境学研究所附属地震火山・防災研究センター准教授が、内陸で大地震が起きると以後数十年にわたり、周囲10km程度の範囲で地震の発生率が増加する傾向にあるという分析結果を出す	11.16 (金)	朝日 (朝刊)
5 愛知県難病団体連合会第35回記念大会18日開催：祖父江逸郎・本学名誉教授	11.16 (金)	中日 (朝刊)
6 本学が、急死した時津風部屋力士の組織片の再検査を依頼される	11.16 (金) 11.17 (土) 11.22 (木) 11.23 (金) 12. 5 (水) 12.11 (火) 12.12 (水)	中日 (朝刊) 朝日 (夕刊) 日経 (朝刊) 日経 (朝刊) 読売 朝日 (朝刊) 他2社 日経 (朝刊) 中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
7 英国の国際的な大学情報誌2誌が今年の国際大学ランキングを発表 本学は112位	11.16 (金) 11.18 (日)	中日 (夕刊) 日経 (朝刊)
8 第3回「あいち平和映画祭2007」4月開催 映画研究会の阿部哲郎さん・本学学生ら実行委員は、幅広い世代とジャンルで平和をとらえられる映画祭を目指す	11.17 (土)	朝日 (朝刊)
9 大幸医療センター禁煙外来では、遺伝子の型を調べてがんのなりやすさを患者に通知し、禁煙を促す 濱嶋信之・医学系研究科教授は、「例え遺伝子診断でがんになるリスクが他の人より高くないとわかっていても、たばこが有害であることに変わりはない」と話す	11.17 (土)	朝日 (夕刊)
10 地震の現代型被害について、福和伸夫・環境学研究科教授は、超高層ビルでの机や棚の床滑りに備え、制震設計や家具の固定の重要性を説く	11.18 (日)	読売
11 第50回日経・経済図書文化賞：大学関係受賞者の所属ランキングで、本学は10位 (4人)	11.19 (月)	日経 (朝刊)
12 読売教育賞の選考委員に、日比裕・本学名誉教授	11.19 (月)	読売
13 DLC (ダイヤモンドライクカーボン) 成膜技術と工業的応用：大竹尚登・工学研究科准教授	11.19 (月)	日刊工業
14 芽はぐくむ研究室：福田敏男・工学研究科教授 ロボ技術の魅力広める	11.19 (月)	日刊工業
15 日本数学コンクールフォローアップセミナー「数理ウェーブ」24日開催	11.19 (月)	中日 (朝刊)
16 市民公開講座「知っておきたい甲状腺の病気」12月9日開催：神部福司・環境医学研究所准教授	11.19 (月) 11.22 (木) 12. 5 (水)	中日 (朝刊) 日経 (夕刊) 中日 (朝刊)
17 中高生 WEEKLY：日本数学コンクール入賞者の表彰式開催	11.19 (月)	中日 (朝刊)
18 後 房雄・法学研究科教授を中心として設立されたNPO「市民フォーラム21」発足10年 NPOの活動基盤を支える新拠点を探索中	11.19 (月)	日経 (夕刊)
19 竹内恒夫・環境学研究科教授と研究室のメンバーが企画した「名チャリプロジェクト」12月1日から16日まで実施 放置自転車を再利用し、名古屋・栄のステーションで無料貸出	11.19 (月) 11.30 (金) 12. 2 (日)	毎日 (夕刊) 中日 (夕刊) 読売 読売
20 本学と薬学部をもつ愛知県内の私立大学が、専門薬剤師育成のため、地域連携型大学院「創薬科学研究科」を共同で設立 濱口道成・医学系研究科長は「薬学分野で活躍する人材を育てるシステムを提案したい」と話す	11.20 (火) 11.29 (木)	中日 (朝刊)
21 JST イノベーションプラザ東海は、産学官の技術者の交流を目的とした「JST サロン東海」を発足 館長の浅井滋生・本学名誉教授は「技術者同士で互いの研究シーズ、ニーズをフランクに語ってほしい」と話す	11.20 (火) 11.22 (木) 11.27 (火)	日刊工業
22 長橋侑万さん・本学学生らが歌舞伎の魅力を紹介 思わぬ展開に驚き、時代は違えども共感できる人情や恋愛にやみつきになる学生も	11.20 (火)	中日 (朝刊)
23 College mode：長橋侑万さん・本学学生 非日常空間のお供に御園座の「もなかアイス」	11.20 (火)	中日 (朝刊)
24 医学部附属病院敷地内で名古屋環境保全条例の基準を超えるヒ素など検出	11.21 (水)	中日 (朝刊)
25 名古屋大学古楽研究会定期演奏会～中世、ルネサンス、バロック期の調べ23日開催	11.21 (水)	中日 (朝刊)
26 NPO 法人「からくりロボット」のメンバーである末松良一・本学名誉教授らが、からくり人形を世界に広げるために12月に渡米、ロボットとの共生思想などについて講演	11.21 (水)	中日 (朝刊)
27 叙位叙勲：正四位瑞宝中綬章 坂本信夫・本学名誉教授	11.21 (水)	中日 (朝刊) 読売

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年11月16日～12月15日]

記事	年月日	新聞等名
28 2007産学官技術交流フェア28～30日開催	11.21 (水)	日刊工業
29 平成19年度医学教育等関係業務功労者文部科学大臣表彰 杉浦一俊・医学部附属病院理学療法士と中川レイ・医学部附属病院看護師	11.22 (木)	読売 中日 (朝刊)
30 2008年度学生募集要項を公表	11.22 (木)	中日 (朝刊)
31 民族舞踊団「音舞」定期公演25日開催	11.22 (木)	中日 (朝刊)
32 近代史研究会例会1日開催：小川晃太郎さん・本学大学院生 「尾張藩における武家方日用の供給構造と日用頭佐和屋」、杉浦光彦さん・本学大学院生 「近世後期領主権力の借財取扱—交代寄合高木家を事例として」	11.22 (木)	中日 (夕刊)
33 追悼抄：西條八東・本学名誉教授	11.22 (木) 12. 7 (金)	読売 中日 (夕刊)
34 ガンダーラ美術とバーミヤン26日開催：静岡県立美術館長・宮治昭・本学名誉教授	11.23 (金)	中日 (朝刊)
35 朝日カルチャーセンター：古尾谷知浩・文学研究科准教授 平城京の今	11.25 (日) 12. 7 (金) 12.14 (金)	朝日 (朝刊)
36 本学の学生が中心となり経営するカフェ「est」 来月で4周年	11.25 (日)	読売
37 地球異変：本学と朝日新聞社がヒマラヤの氷河を共同調査	11.25 (日) 11.26 (月)	朝日 (朝刊)
38 お宝発見：宇宙への一歩「全周体位傾斜装置」、博物館に収蔵	11.26 (月)	朝日 (朝刊)
39 本学と東京大学地震研究所が、宇宙線「ミュオン粒子線」を写真乾板で捕らえ、火山の内部を透視する技術を共同開発	11.26 (月)	朝日 (朝刊)
40 大学入試センター試験のリスニングテスト実施説明会開催	11.26 (月)	中日 (朝刊)
41 高地の暮らし ヒマラヤの人々：安成哲三・地球水循環研究センター教授 山の民「天気が変わる」	11.26 (月)	朝日 (夕刊)
42 名古屋手紙の会11月例会：塩村耕・文学研究科教授	11.26 (月)	中日 (夕刊)
43 「第1回日中環境シンポジウム」15日開催	11.27 (火)	中日 (朝刊)
44 学生街ダンス：岩田優子さん・本学学生 たくあんで食器洗い!?	11.27 (火)	中日 (朝刊)
45 学生之新聞：小林さやかさん・本学学生 私のエコライフ 風呂の残り湯利用	11.27 (火)	中日 (朝刊)
46 本学 英国のウォリック大学と産学連携協定を締結	11.28 (水)	日刊工業
47 西尾市民病院内のバンコマイシン耐性腸球菌集団感染 市民病院外部対策委員の太田美智男・医学系研究科教授は「集団感染の予防には、患者の手洗いや施設消毒の徹底が第一」と話す	11.28 (水)	中日 (朝刊)
48 第6回読売・大学中部地区懇話会27日開催：夏目達也・高等教育研究センター教授が、「ティップス先生の実践から見えてきたもの」のテーマで講演	11.28 (水)	読売
49 国土形成計画シンポジウム27日開催：森川高行・環境学研究科教授	11.28 (水)	中日 (朝刊)
50 大学ブランドカラランキング 本学は東海圏で3位	11.28 (水)	日経 MJ
51 地球水循環研究センターは局地落雷や竜巻などを素早くとらえ、降雨を正確に観測できる「水循環観測マルチパラメータシステム」を導入	11.29 (木)	中日 (朝刊)
52 福田敏男・工学研究科教授の研究グループは、2足歩行から4足歩行に自動で体勢を変え坂道を上る「ゴリラ型ロボット」を開発	11.29 (木)	日刊工業
53 口遊録：大熊繁・工学研究科教授 自動車の「頭脳」電子技術を紹介	11.29 (木)	中日 (朝刊)
54 木曾川水系流域委員会 (委員長・辻本哲郎・工学研究科教授) は、「木曾川水系河川整備計画」の原案を決める	11.29 (木)	中日 (朝刊)
55 読売講座：「留学生10万人計画のその後」28日開催	11.29 (木)	読売
56 愛知学院大学モーニングセミナー12月9日開催：「食事を制するものは人生を制する—食事は学力向上の妙薬になるか!？」 本学教員の他、元京都大学霊長類研究所長ら5人が講演	11.29 (木)	中日 (朝刊)
57 第21回中日産業技術賞：選考委員 平野真一総長、専門委員 内山晋・本学名誉教授、岡本佳男・本学名誉教授、垣谷淳司・元本学教授、河本邦仁・工学研究科教授	11.30 (金)	中日 (朝刊)
58 「伊勢湾流域圏の水循環」特別座談会開催：辻本哲郎・工学研究科教授	11.30 (金)	中日 (朝刊)
59 第11回伊勢湾・三河湾を考える会29日開催：科学技術交流財団理事長・松尾稔・元本学総長	11.30 (金) 12. 6 (木)	中日 (朝刊)
60 愛知学院大学「口腔先天異常遺伝学・言語学」寄付講座12月1日開催：瀧嶋信之・医学系研究科教授	11.30 (金)	中日 (朝刊)
61 訃報：山本千秋・本学名誉教授	11.30 (金)	中日 (朝刊) 他4社
62 名古屋歴史科学研究会例会8日開催：岡崎清宜・環境学研究科研究員が「1930年代華西における信用構造の再編—桐油流通・金融を中心に」の題で講演	11.30 (金)	中日 (夕刊)
63 本学と中京大学、南山大学、名城大学が、国立私立の枠を超えて共同で研究活動や人材育成を進める「名古屋山手四大学コンソーシアム構想」を検討 平野真一総長は「国際競争力のある質の高い人材育成を進めたい」と話す	12. 1 (土)	中日 (朝刊)
64 備える：糸魚川—静岡構造線の活断層による内陸直下型地震の、調査観測プロジェクトに参加する鷺谷威・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター准教授は、「地震はいつ起きてもおかしくない。考えられる限りの準備が必要」と話す	12. 1 (土)	中日 (朝刊)
65 叙位叙勲：杉山幸男・本学名誉教授	12. 1 (土)	読売


本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年11月16日～12月15日]

記事	年月日	新聞等名
66 舛名大周一さん・本学卒業生は、あわただしかった一年を振り返り、「土俵上での精神面の弱さを直したい」と話す	12. 1 (土)	中日 (夕刊)
67 「名古屋大学イニシアティブ」の企画で、「脱温暖化都市づくり」をテーマにした国際シンポジウム1日開催	12. 2 (日)	朝日 (朝刊)
68 病院の実力：血液がん 移植件数などの治療実績、得意な移植法は病院選びの一つの指標	12. 2 (日)	読売
69 第69回東海学生駅伝対校選手権大会開催 本学は男子3位、女子4位	12. 2 (日) 12. 3 (月)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊) 他1社
70 生田幸士・工学研究科教授は92年「マイクロ光造形法」を開発 レーザー光を「光硬化ポリマー」に当てて「ミニ化学工場」を作り、小スケールの物質の合成や分析を行う	12. 3 (月)	朝日 (朝刊)
71 シンポジウム「再生医療が実現する高齢社会のQOL ー若々しい歯、眼、骨、そして皮膚ー」8日開催：上田実・医学系研究科教授	12. 3 (月)	読売
72 「水のいのちのちものづくりの国際シンポジウム」1日開催 パネリストの辻本哲郎・工学研究科教授は「限られた水の恩恵を適切に生かすためには、水の使い方を見直すことも大事だ」と話す	12. 3 (月)	中日 (朝刊)
73 医学部附属病院に増員要請するも派遣のメドがたたず、医師不足のため半田市立半田病院が母体搬送受け入れを休止	12. 3 (月)	中日 (朝刊) 読売
74 「危機に立つジャーナリズム」24日開催：春名幹男・国際言語文化研究科教授	12. 4 (火)	中日 (朝刊)
75 「私たちは宇宙から生まれたー生命誕生のなぞを探る」愛知学院大学で11日開催：福井康雄・理学研究科教授が講演	12. 4 (火)	中日 (朝刊)
76 本学発のバイオベンチャー「ストレックス」が、泳ぐ力の強い精子を簡便に選別する装置を開発	12. 5 (水)	日経 (朝刊)
77 経済協力開発機構の学習到達度調査で日本の順位低下 算数・数学専門部会で指導要領の改定作業にもかかわらず浪川幸彦・多元数理科学研究科教授は、「公式に当てはめる問題演習を重視しすぎた。『数学』も『言語』だ」という視点から、他人に分かりやすく説明するという意識を持たせることが必要」と話す	12. 5 (水)	朝日 (朝刊)
78 経済協力開発機構の学習到達度調査で日本の順位低下 植田健男・教育発達科学研究科教授は、「授業の質を高めることが大切で、単純に授業時間数などを増やせばいいという議論につなげるのは本末転倒だ」と話す	12. 5 (水)	中日 (朝刊)
79 NAGOYAを開く：留学生を引きつける名古屋 生活面、産学の支援が今後の課題	12. 5 (水)	日経 (朝刊)
80 福田敏男・工学研究科教授の研究グループが、カテーテル手術訓練用の血管モデルで、色の変化で血管内壁に加わる応力を判別できる技術を開発	12. 6 (木)	日刊工業
81 現場復帰：住友電気工業は今年5月エトピア科学研究所と共同で、希少資源の再資源化技術を開発する研究拠点を設置 今後も環境などの分野で大学と連携する方針	12. 6 (木)	日刊工業
82 読売講座：「世界のスポーツとアジア」5日開催 読売新聞東京本社運動部・結城和香子次長	12. 6 (木)	読売
83 「乳歯幹細胞バンク」設立 上田実・医学系研究科教授は「乳歯幹細胞は近親者へ世代間で移植できる可能性がありバンクの価値は高い」と話す	12. 6 (木) 12. 7 (金)	中日 (夕刊) 毎日 (夕刊) 朝日 (朝刊) 他2社
84 名古屋国際関係合同ゼミナール9日開催 本学、南山大学など県内7大学と、県外4大学の国際関係ゼミの合同研究発表	12. 7 (金)	中日 (朝刊)
85 第2回海と地球の研究所セミナー「地震を海から探る」1月12日開催：山岡耕春・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授	12. 7 (金)	中日 (朝刊)
86 社会人 my キャンパス：コラムニスト・ジョン・ギャスライト氏・本学卒業生 海渡り“本立で”の国へ	12. 7 (金)	日経 (夕刊)
87 本学 来年2月2日「豊田講堂」改修竣工式に合わせ「ホームカミングデー」開催 平野真一総長は、「豊田講堂はいい仕上がりで大規模な国際会議にも対応できる。一般の方にも見に来て欲しい」と話す	12. 8 (土)	朝日 (夕刊)
88 「第13回締約国会議」インドネシア・バリ島で開催：藤木利之・本学研究員、高知大学、バリ島の国立ウダヤナ大学の合同チームが、バリの湖底地質調査に乗り出す	12. 8 (土)	中日 (朝刊)
89 学力危機：理化学研究所理事長・野依良治・本学特任教授 地に足つけて 理科教育	12. 8 (土)	読売
90 「第13回締約国会議」世界の自治体・学識者でつくる「クライメット・アライアンス (気候連合)」8日開催：竹内恒夫・環境学研究科教授	12. 9 (日)	中日 (朝刊)
91 平成19年度「ビタミンの日」講演会13日開催：堀尾文彦・生命農学研究科教授 「ビタミンCと健康」	12. 9 (日)	中日 (朝刊)
92 中日新聞を読んで：中西久枝・国際開発研究科教授 多文化、他民族との共生	12. 9 (日)	中日 (朝刊)
93 「第43回留学生の夕べ」8日国際センターで開催	12. 9 (日)	中日 (朝刊)
94 名古屋市立大学大学院の医学博士号審査を巡る汚職事件を受け、本学は「全学問題検討委員会」を設置し調査を開始	12.11 (火)	朝日 (朝刊) 他3社
95 世界的研究拠点「大名古屋大学」(仮称) 設立検討	12.11 (火)	中日 (朝刊)
96 福田敏男・工学研究科教授の研究グループが、患者個人の動脈形状に対応する生分解性の人工血管用基礎構造物を開発	12.11 (火)	日刊工業
97 名大サロンの主役：松下裕秀・工学研究科教授 不思議な高分子の現象	12.11 (火)	中日 (朝刊)
98 「わさびフォーラム」10日名古屋のホテルで開催：大澤俊彦・生命農学研究科教授	12.11 (火)	読売
99 「東海ものづくり創成協議会」に新たな研究会設置 本学や関連企業がIT分野の若手育成に向け、準備を進める	12.11 (火)	中日 (朝刊)
100 本学出身者が占める教員の割合は、44.4%	12.11 (火)	読売
101 医学部附属病院放射線科などによるベンチャー企業と愛知県の進める粒子線治療施設が近く着工	12.11 (火)	朝日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年11月16日～12月15日]

記事	月日	新聞等名
102 政党ビラ配布は「住居侵入罪を構成する」として、東京最高裁判所の逆転有罪の判決に対し、愛敬浩二・法学研究科教授は「商業ビラ配布が放置されているのに、政党ビラ配布だけを排除するのは整合性がとれない」と話す	12.12 (水)	日経 (朝刊)
103 本学、名古屋市立大学に加え岐阜大学の医師派遣により、岐阜県立多治見病院精神科が外来診療継続	12.12 (水)	中日 (朝刊)
104 情報文化学部シンポジウム「ニセ科学・情報を見る学問の眼」15日開催：伊勢田哲治・情報科学研究科准教授	12.12 (水)	中日 (朝刊)
105 時のおもりの総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授 人間の危機 環境を意識して	12.12 (水)	中日 (朝刊)
106 叙位叙勲：正四位 小穴進也・本学名誉教授	12.12 (水)	読売
107 名古屋大学英文学会公開講座クリスマスセミナー21日開催	12.12 (水) 12.13 (木)	中日 (夕刊) 朝日 (夕刊)
108 アーカイブス整備に取り組む大学が急増 本学は90年代に「名古屋大学史資料室」を設置	12.12 (水)	日経 (夕刊)
109 第2回市民公開講座「再生医療とインプラント」16日開催：上田実・医学系研究科教授	12.13 (木) 12.14 (金)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
110 老年学：愛知淑徳大学教授・井口昭久・本学名誉教授 若さ保つ「やればできる」	12.13 (木)	朝日 (朝刊)
111 家森信善・経済学研究科教授は、今回の税制改正案のなかの証券優遇措置の取扱いについて、「証券市場の振興が国民生活にとって重要な理由をわかりやすく伝えていく努力が求められる」と話す	12.14 (金)	中日 (朝刊)
112 竹内信仁・経済学研究科教授は、法人事業税を都市から地方へ再配分する制度の導入について、「地方自治体の税源は正のため、今回の措置はやむを得ない」と話す	12.14 (金)	中日 (朝刊)
113 東海地方11月の地震：林 能成・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助教	12.14 (金)	読売
114 第7回名古屋大学遺伝子実験施設公開セミナー19日開催	12.14 (金)	中日 (朝刊)
115 社会人 my キャンパス：コラムニスト・ジョン・ギャスライト氏・本学卒業生 勇気を与える木登り効果	12.14 (金)	日経 (夕刊)
116 風向計：家森信善・経済学研究科教授 保守的経営に求められる説明能力	12.15 (土)	読売
117 国土形成計画シンポジウム 中部圏広域地方計画に望むもの27日開催：森川高行・環境学研究科教授	12.15 (土)	中日 (朝刊)
118 日本数学コンクールフォローアップセミナー「数理ウェブ」22日開催	12.15 (土)	中日 (朝刊)
119 訃報：金川昭・本学名誉教授	12.15 (土)	中日 (朝刊) 他4社

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容
1月22日(火) 場 所：高等総合研究館 6階 カンファレンスホール 時 間：17:00～ 入 場 料：無料	第18回高等研究院セミナー 講演内容：①脊髄損傷は治せるか？ ②科学者の不正行為—その背景と防止策— 講 演 者：①門松健治 (医学系研究科教授) ②山崎茂明 愛知淑徳大学文学部図書館情報学科教授
[問い合わせ先] 研究協力・国際部研究支援課 高等研究院掛 052-788-6051、6153	
1月30日(水) 場 所：総合保健体育科学センター 会議室 時 間：16:30～ 入 場 料：無料	コロキウム 講演内容：「大学体育必修の根拠を探る」 講 演 者：出原泰明 (総合保健体育科学センター教授)
[問い合わせ先] 総合保健体育科学センター 小川豊昭 052-789-5836	
2月2日(土) 場 所：あいち国際プラザ 8階大会議室 時 間：13:20～	小中学校教員、日本語ボランティア現職者研修会
[問い合わせ先] 留学生センター 浮葉准教授 052-789-5771	

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

2月2日(土)

場 所：豊田講堂
時 間：10:30～

[問い合わせ先]
総務部秘書課 052-747-6459



名古屋大学豊田講堂改修竣工式・同竣工記念ホームカミングデイ 「ものづくり源流・からくりからロボットまで」

プログラム

[豊田講堂ステージ]

10:30～ トヨタ・パートナーロボットによるファンファーレ演奏

10:35～11:10 豊田講堂改修竣工記念式典

11:20～11:50 尾陽木偶師九代 玉屋庄兵衛氏による「からくり人形実演」

12:00～ トヨタ・パートナーロボットによるパフォーマンス

[豊田講堂メインエントランス]

12:30～ 銘板除幕

[シンポジウムエントランスホール]

12:40～ 陶壁「和多津海」除幕（作：加藤唐九郎）

[シンポジウム会議室、豊田講堂ホワイエ]

13:00～14:30 竣工記念パーティー

[豊田講堂ステージ]

14:40～15:40 トークセッション「日本の教育を考える」

パネリスト 丹羽宇一郎（伊藤忠商事(株)取締役会長）

郷 通子（お茶の水女子大学長）

辻村 哲夫（(独)国立美術館理事長）

コーディネーター 中日新聞常務取締役 小出 宣昭

注：プログラム等は、変更となる場合がございますのでご了承願います。



2月16日(土)

場 所：経済学研究科
カンファレンスホール
時 間：10:00～12:00

[問い合わせ先]
経済学研究科エクステンション・サービス
Fax：052-788-6197
E-mail：ecoextender@soec.nagoya-u.ac.jp

名古屋大学オープンカレッジ「自由奔放！サイエンス」

講演内容：「地球大気と環境問題」

講演者：松見 豊（太陽地球環境研究所教授）

2月18日(月)

場 所：環境総合館1階
レクチャーホール
時 間：18:00～19:30
入 場 料：無料

[問い合わせ先]
災害対策室 052-788-6038
taisaku@seis.nagoya-u.ac.jp
http://anshin.seis.nagoya-u.ac.jp/taisaku/

第37回防災アカデミー

講演タイトル：スマトラ津波と復興～私が災害研究に惹かれたわけ～

講演者：高橋 誠（環境学研究科准教授）

※どなたでもご自由に聴講できます。



名大トピックス No.176 平成20年1月15日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

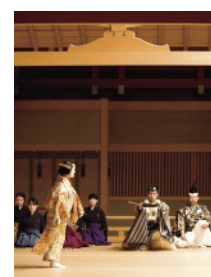
名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
(http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/) でもご覧いただけます。

表紙

名古屋能楽堂での自演会
能「船弁慶」(名大観世会)
(平成19年12月8日)



69 名大トピックス—15年のあゆみ—

本誌『名大トピックス』は、1993(平成5)年2月に創刊され、来月で15周年をむかえます。当時、すでに『名古屋大学学報』がありました。こちらは学内規則、人事異動などの記事が中心で官報的性格が強く、年4回の発行でした。大学をめぐる新しい潮流や動向を適確に伝達し、本学の構成員と意思疎通を図ることを目的とし、本学での主要な出来事や話題などのニュース性を重視した記事を中心に提供する広報誌として本誌は創刊されました。

本誌は今月号で176号を数えますが、特集号・特別号として号外も出しています。科研費特集号が最も多く、そのほかには21世紀COE特集号、定年退官教授の特集号、新年特別号が見られますが、2001(平成13)年10月には、野依良治特別教授(当時大学院理学研究科教授)のノーベル化学賞受賞を報じる特別号が刊行されました。また、号

外ではありませんが、2000年3月には、名古屋大学学術憲章の制定を別冊で報じる号も見られます。

皆さんの記憶にも新しいところですが、本誌は2005(平成17)年4月(第143号)から誌面のスタイルを一新しました。それまでは表紙と裏表紙以外はモノクロでしたが、全ページカラーとなりました。また表紙も、従来は記事の写真と目次で構成されていましたが、目次を表紙裏に移し、年度ごとに統一したテーマの写真(2005年度は豊田講堂の四季、2006年度は学内の建築物、2007年度はサークル活動)を全面に掲載しています。

バックナンバーは、2001年度以降のものを名大ホームページから閲覧することができます。それ以前の号は大学文書資料室に保存されており、どなたでも閲覧が可能です。



1	2	3
4	5	

- 1 創刊号(1993年2月)。当初はB5版で、第20号(1995年1月)から現在のA4版となった。
- 2 学術憲章制定を特集した第78号別冊(2000年3月)。
- 3 野依教授のノーベル化学賞受賞を報じる特別号(2001年10月)。
- 4 旧スタイル最後の第142号(2005年3月)。
- 5 新スタイル最初の第143号(2005年4月)。